主唱／法務省

第72回“社会を明るくする運動”
～犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える地域のチカラ～

作文コンテスト
入賞作文集

“社会を明るくする運動”中央推進委員会
更生保護法人 立川更生保護財団

第72回“社会を明るくする運動”作文コンテスト

令和４年12月23日　法務省

法務大臣賞表彰式

（前列右から）
日本更生保護協会事務局長　幸島　聡
日本ＢＢＳ連盟事務局長　西瀬戸　伸子
中学生の部　受賞者　植山　いろは
法務大臣　齋藤　健
小学生の部　受賞者　折居　潤希
日本更生保護女性連盟会長　千葉　景子
全国保護司連盟事務局長　吉田　研一郎

（後列右から）
植山さん担任教諭
植山さん御家族
折居さん御家族
法務省大臣官房秘書課長　内野　宗揮
法務省保護局長　宮田　祐良

（敬称略、所属役職等は表彰式当時）

小学生の部　法務大臣賞　授与

中学生の部　法務大臣賞　授与

はしがき

法務省が主唱する〝社会を明るくする運動〟は、すべての国民が、犯罪や非行の防止と犯罪や非行をした人たちの更生について理解を深め、それぞれの立場において力を合わせ、犯罪や非行のない安全で安心な明るい地域社会を築くための全国的な運動です。

その中でもこの作文コンテストは、本運動の一環として、次代を担う全国の小・中学生に、日常の家庭生活や学校生活の中で体験したことを基に、犯罪・非行のない地域社会づくりなどについて考えたことや感じたことを作文にすることを通じ、本運動に対する理解を深めてもらうことを目的としております。第43回（平成五年）運動から始められ、今回で三十回となりました。

令和四年の作文コンテストには、全国から小学生の部一三一、二七〇点、中学生の部一八五、〇五三点、合計三一六、三二三点の応募がありました。応募作品については、各都道府県推進委員会の選考を経て、中央推進委員会で審査した結果、法務大臣賞をはじめとして、小学生の部十六点、中学生の部十六点の入賞作品が決定しました。

本作文集は、この入賞作品を収録したもので、更生保護法人立川更生保護財団の御協力により制作されました。一人でも多くの人に作文を読んでいただき、児童・生徒の皆さんの思いを犯罪や非行のない地域社会づくりに役立ててもらうとともに、これから応募をされる児童・生徒の皆さんの参考になるよう願っております。

終わりに、この作文コンテストの実施に当たり、御後援をいただいた全国連合小学校長会、全日本中学校長会、全国小学校国語教育研究会、全日本中学校国語教育研究協議会、公益社団法人日本ＰＴＡ全国協議会をはじめ、多大な御尽力をいただいた全国の教育委員会や学校関係者の皆様に対し、深く感謝を申し上げます。

令和五年三月　法務省

〝社会を明るくする運動〟中央推進委員会

目次

最優秀賞（小学生・中学生）

法務大臣賞

悩みの風船がはじける前に……岩手県盛岡市立城北小学校　六年　折居　潤希　6
挨拶でつながる社会……岐阜県揖斐川町立谷汲中学校　三年　植山　いろは　9

優秀賞

全国連合小学校長会会長賞

「聞き上手」になろう……宮城県塩竈市立第一小学校　六年　岩崎　凌空　12
少しの思いやりで少しの勇気を……千葉県千葉市立都小学校　六年　宮前　奈央　15
ぼくが考える社会を明るくする運動……香川県丸亀市立郡家小学校　四年　香川　遥太　17

全日本中学校長会会長賞

一人一人が大切だから……栃木県下野市立南河内第二中学校　三年　長谷川　陽南　20
勇気の道しるべ……新潟県柏崎市立第三中学校　二年　品田　玲菜　22
刑務所見学から学んだこと……島根県浜田市立旭中学校　二年　竹田　凪沙　25

全国保護司連盟理事長賞（小学生の部）

つながりを感じられる社会に……　和歌山県橋本市立高野口小学校　六年　和田希良々　27
私にできること……　長崎県雲仙市立大塚小学校　六年　柿川里奈　29
「私を」こばまない明るい社会に　…　鹿児島県南九州市立中福良小学校　六年　若林美優　32

全国保護司連盟理事長賞（中学生の部）

偏見を洗い流すブルースティック…東京都清瀬市立清瀬第五中学校　一年　田谷朋佳　35
「私の第一歩」……　香川県三豊市立詫間中学校　三年　林本結宇　37
みんなが輝ける社会を目指して……　鹿児島県奄美市立朝日中学校　二年　川節桃香　39

日本更生保護女性連盟会長賞（小学生の部）

独りぼっちにさせない……　北海道札幌市立稲積小学校　六年　鎌口栞奈　41
特別な日……　長野県上田市立豊殿小学校　六年　戸兵心瞳　44
支え合って生きていく……　愛知県岡崎市立六ツ美中部小学校　六年　段下慶士郎　46

日本更生保護女性連盟会長賞（中学生の部）

柴犬サンタと私の散歩道……　北海道札幌市立篠路西中学校　二年　村上桃音　49
自分を変える……　静岡県裾野市立深良中学校　二年　根本果穂　52
寄り添いの心……　佐賀県佐賀大学教育学部附属中学校　一年　武富悠真　55

日本ＢＢＳ連盟会長賞（小学生の部）

地域の自まん再発見……岐阜県高山市立岩滝小学校　六年　川尻英輔　58
寄りそう心……愛知県清須市立星の宮小学校　六年　早川佳克　61
つながる明るい未来へ……福岡県北九州市立戸畑中央小学校　六年　榎本莉子　64

日本ＢＢＳ連盟会長賞（中学生の部）

一言の重み……岩手県一関市立磐井中学校　三年　千葉日菜　67
心の孤立を防ごう……愛知県名古屋市立一柳中学校　三年　尾崎孝太朗　70
社会を明るくする食堂……山口県岩国市立岩国中学校　一年　墨川翔也　73

日本更生保護協会理事長賞（小学生の部）

まずはあなたの一歩から……埼玉県朝霞市内公立小学校　六年　（氏名非公表）　76
何度言ったら分かるの……富山県富山市立音川小学校　六年　田中愛　79
人を思う気持ちが犯罪を防ぐ……香川県観音寺市立一ノ谷小学校　六年　石川美菜子　82

日本更生保護協会理事長賞（中学生の部）

更生保護を知って……群馬県草津町立草津中学校　二年　米浩孝　85
犯罪が必要のない社会を……奈良県生駒市立生駒南中学校　三年　三橋野乃子　88
関わりから生まれるもの……沖縄県与那原町立与那原中学校　二年　松田光央　91

更生保護法人　立川更生保護財団について……94

第73回〝社会を明るくする運動〟
～犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える地域のチカラ～
作文コンテストのお知らせ……95

お問い合わせ先……96

審査員

（役職名は審査当日のもの）

全国小学校国語教育研究会会長　佐伯孝司

全日本中学校国語教育研究協議会長　勝田敏行

更生保護法人
全国保護司連盟理事長　谷垣禎一

日本更生保護女性連盟会長　千葉景子

特定非営利活動法人
日本ＢＢＳ連盟会長　今福章二

更生保護法人
日本更生保護協会理事長　榊原定征

法務省保護局長　宮田祐良

小学生の部

法務大臣賞（最優秀賞）

悩みの風船がはじける前に

岩手県盛岡市立城北小学校　六年　折居（おりい）　潤希（じゅんき）

ぼくは、どこにでもいる普通の小学生だけれど、犯罪のニュースを見るたびに、決して他人事ではないと感じる。それは、事件を起こしたきっかけとなった出来事が、だれの身にも起こる可能性があると考えるからだ。事件を起こすきっかけとなった出来事は人によって様々だが、特に、ぼくがどきっとするのが、友人関係に思い悩んで、少年犯罪に手をそめてしまった事例だ。

ぼくが夏休みに作った作品が、休み明け、学校に持って行った初日に、だれかの手によって壊された。三日間かけて作った大作だったので、とてもショックだった。展示されている物は触らないこと、触りたい場合は本人の許可を得ることになっていたので、だれかがこっそり遊んでいるうちに、うっかり壊してしまったのだろう。わざとではないことを祈って、名乗り出てくれるのを待っていた。正直に言ってくれれば、責めるつもりは全くなかった。しかし、最後まで名乗り出る人はだれも居なかった。帰り際、一人の女子が、

「私だったら、そんなの一日で作れるし。」

とぼくに言った。言葉のナイフが、ぼくの胸に深くつきささった。

ぼくの社会は小さくて、他の人から見たらちっぽけな悩みかもしれない。だけど、そのちっぽけな悩みがどんどんふくらんでいって、何かの拍子に、風船のようにはじけてしまうかもしれない。犯罪に手をそめてしまった人だって、ある日突然、悪いことをしようと決めたわけではないはずだ。ずっと何らかの悩みを抱えていて、針の先が触れたことがきっかけとなり、風船がはじけてしまったのだと思う。そう考えると、やはり他人事とは思えないのだ。

しかし、ありがたいことに、ぼくの周りには、ぼくの悩みの風船がはじけてしまう前に、空気を抜いてくれる人たちがたくさんいる。家族はもちろん、学校の友達や先生、近くに住む祖父母、地域の方々、習い事の先生など様々だ。中でも、特にするどいのがピアノの先生だ。ぼくの演奏を聴いただけで、

「今日、何かあった?」

と聞いてくるから、さすがだ。そして、気のすむまで、ゆっくりぼくの話を聞いてくれる。聞いてもらうだけで、ぼくの悩みの風船はみるみるしぼんでいくから不思議だ。

反対に、ぼくが周りの人の変化に気が付くこともある。児童会長として、委員のみんなと一緒にあいさつ運動を行う中で、いつもと様子が違う人を見つけることがある。あいさつに元気がない、目を合わせないなど、気になるサインを出している。よく、

「明るいあいさつをしましょう。」

と言われることがあるが、本当に辛いときには、無理に明るくする必要はないと思う。それは、あいさつから発せられる「心のSOSサイン」を見逃してしまいかねないからだ。犯罪のない明るい社会に必要なことは、周囲が心のSOSサインを見逃さないこと、そして、一人で悩みを抱えず、だれかに相談することだ。だれかに助けを求めることは、決してはずかしいことではない。

日本は、「失敗が許されない社会」という印象

がある。例えば、「不登校やひきこもりになったら人生の終わり」、「受験や就職に失敗したら絶望的」など、失敗をあまりにもネガティブにとらえる傾向がある。失敗をおそれるあまり、がんじがらめになっていると感じる。しかし、ひきこもりや不登校は、決して悪いことではないとぼくは思う。辛いときは、ひと休みしていいんだよ、と手をさしのべてくれる社会が、今の日本には必要だと強く感じる。

世の中は、理不尽なことだらけだ。生きていれば、いやな事がたくさんある。もしかしたら、良い事よりも、いやだと感じる事の方が多いかもしれない。「明るい社会」とはどういうものかと考えたとき、妹の勉強机の前にかざってある、「明日がたのしみになるカレンダー」が目に留まった。とてもいいなと思った。今では、ぼくもそれを真似して、寝る前に明日の楽しみな事を書きこんでいる。物事を前向きに考えることも、「明るい社会」に欠かせないことだ。

ぼくは今後も、あいさつ運動を通して、仲間が発する心のSOSサインを見逃さないように心がけていこうと思う。そして、悩みの風船がはじける前に、空気を抜いてあげられる存在になりたい。

中学生の部

法務大臣賞（最優秀賞）

挨拶でつながる社会

岐阜県揖斐川町立谷汲中学校　三年　植山（うえやま）　いろは

私が住んでいる地域のおばあちゃんパワーはすごい。おばあちゃん達は、私達を見ると、すぐに「おはようございます。」と大きな声で挨拶をしてくれる。私も負けじと大きな声で「おはようございまーす。」と返す。学校から帰ってくると、「お帰り。」と迎えてくれる。私は、見守られているようで安心する。また、おばあちゃんネットワークは強く、この地域の事なら、おばあちゃん達に聞けば大抵わかる。私のこともよく知ってくれている。「何で知ってるの？」と驚くこともあるが、自分を気にかけてくれていることは、嬉しい。さらに、いつも登校を見守ってくれるおばあちゃんは、私が朝集合場所にいないと、私の妹に、

「今日は、いろはちゃんはどうしたの？」

と聞き、心配してくれる。私達が安心してここに暮らしていられるのは、おばあちゃんパワーに支えられているからだと思う。「明るい社会」とは、こういう社会のことを言うのではないだろうか。

　このおばあちゃんパワーには、もちろん私の祖母も入っている。私は小学生の時、祖母から更生保護女性会のことを教わった。祖母は、更生保護女性会の一員だった。小中学校を回ってお話をし

たり、公民館祭りの時に啓発運動をしていたりした。その時に祖母が話してくれた「みんな一人一人が大事な存在なんだよ。」という言葉が今でも心に残っている。祖母が作ってくれた更生ペンギンのホゴちゃんとサラちゃんは、我が家のかわいいマスコットだ。ホゴちゃんとサラちゃんを見るたびに、祖母の言葉を思い出す。

私が安心できる地域に住んでいる一方で、社会では、残酷で悲しい犯罪がなくならないのが現状だ。私は、犯罪のない明るい社会にするためには、人と人とのつながりがとても重要なカギだと思う。

私は、学級委員に立候補したことがあるが二度も落選した。小学生の時は落ちたことがなかったから、落ちたときはみんなに認められていない気がして、クラスで自分一人だけが取り残されているように感じた。もう何もやる気が起きなかったし、何かをやっても誰かに笑われるような気がして苦しかった。落ちたことが悔しくて、怖くて、不安になって泣いていた時、担任の先生が声をかけてくれた。

「今、いろはさんはとても悔しいし、不安になっていると思う。でも、いろはさんはできる子なんだから、ここでなにもかもあきらめるんじゃなくて、その悔しさをバネにして、次頑張る原動力にしたらいいんじゃないかな。」

私はこの言葉に救われた。自分を見守ってくれる人がいるんだと胸が熱くなった。自分が独りになった気がして怖くて流していた涙は、嬉しさの涙に変わった。

犯罪は、ある特別な人たちが起こすものではない。誰にでも、犯罪者になってしまう可能性はある。そのきっかけは人それぞれだ。でも、そのきっかけから犯罪へと向かわないためには何が必要なのだろう。私は、先生が支えてくれたから立ち直ることができた。誰もが失敗や不安になる経験をし、自暴自棄になってしまうことはあるだろう。でも、そこでそのまま犯罪に手を染めてしま

うか、立ち直って次に進むかの分かれ道となるのは、支えてくれる人がいるか、またその変化に気づいて手を差し伸べてくれる人がいるかだと思う。相手の変化に気づくにはどうしたらいいのか。私は知っている。これこそ、おばあちゃんパワーだ。そう「挨拶」をすること。

生徒会で人権についての取り組みを行うことになったとき、その一つとして「挨拶」が挙がった。

「どうして挨拶が大切なんだと思う？」

と先生に聞かれ、私はハッとした。私は、それまで、挨拶はマナーとしてやるものという風にしか捉えていなかった。どうして挨拶をするのか、そんな事一度も考えたことがなかった。考えてみると、おばあちゃん達の挨拶から安心感が得られる理由がわかった。「おはようございます。」といわれたら「おはようございます。」と返す。短い言葉のコミュニケーションの中にも自分を見てくれている人が近くにいるということがわかるし、自分の存在を認めてくれていると実感できる。それが安心できる理由だ。また、挨拶は気持ちのバロメーターのようなもので、気持が挨拶の声色に現れてくる。だから、ちょっとした変化に気づくきっかけにもなり得るのだ。

私は、自分が住んでいる地域が大好きだ。お互いのことをよく知っていて、何かあれば助け合う。誰もが安心して暮らすことのできる場所があるっていいなと思う。このような場所を社会全体にも広めていくために、私は挨拶を通じて人とつながり、誰かのちょっとした不安に気が付いたら、先生が私にしてくれたように、その人に手を差し伸べ、支えられるようにしていきたい。

小学生の部

全国連合小学校長会会長賞（優秀賞）

「聞き上手」になろう

宮城県塩竈市立第一小学校　六年　岩崎（いわさき）　凌空（りく）

僕は今年の夏休み、市内の各小中学校の生徒会を中心とした、児童生徒健全育成ボランティア『アルカス☆塩釜』のディスカッションに参加しました。今回話し合うテーマであった「いじめ撲滅に向けた取り組み」についてみんなで意見交換をし、いじめの未然防止の具体策をみんなで提案しました。

今回初めて参加した僕にとって、とても有意義な時間ではありましたが、帰宅してからふと、僕たちの話し合いは、本当に生かされるのだろうか、この話し合いによって、いじめが本当に無くなるのだろうか、という疑問がわいてしまいました。昔からよく、広告費をかけてタレントを起用して、いじめ撲滅ポスターを作ったり、学校でも「いじめはやめよう」と何万回も叫び続けてきたのにもかかわらず、ちっともいじめはなくなっていません。そしてこの瞬間も、どこかで誰かがいじめられているかもしれません。「いじめはやめよう」と呼びかけるのは正しいことだとは思うけれど、しかし、それが残念ながら、解決策になっていない気がします。だからといって、否定しているのではありません。まずは、この事実を受け

止めないと何も変わらないのではないか、そして問題解決に向かううえで大切なのは、「いじめの正体」を知ることだと僕は思いました。

いじめをなくそうと、これまで僕たちは、いじめられた子の側の気持ちに立って見てきました。けれど、それでは解決できませんでした。ならば思い切って、いじめる子の側に立っていじめを見てみるとどうでしょうか。

すると見えてくる「いじめの正体」……。

僕はこんな経験をしたのを思い出しました。かつて、同級生に暴力をふるってしまう子がいました。でも、普段「乱暴な子」というレッテルを貼られているその子は、たまたま教室の場所がわからなくて泣いていた一年生の女の子に、一緒にその教室まで行って案内してあげていました。また、僕が給食当番で重い汁物を運んでいた時に、何も言わずに手伝ってくれました。「ありがとう」と言った僕の言葉に無反応でしたが、きっと本当は、誰よりも優しい子なのだと思いました。では

なぜ、暴力をふるってしまうのでしょうか。僕は、親が仕事で忙しいためにその子が話を聞いてもらえなかったり、親からよく怒鳴られたり叩かれたりすることを聞いていました。もしそれが本当だとしたら、その子はきっと、さびしかったのだと思います。さびしくて、みんなにかまってもらいたくて、暴力をふるって目立とうとしていたのかもしれません。あるいは、その日ごろのさびしいストレスを発散させるために暴力をふるっていたのかもしれません。でも、その子の気持ちは誰にも分かりませんでした。先生が手をさしのべても、その子は素直になれずに背を向けているように見えました。

僕は今、学校生活を普通に送ることができ、家では学校での出来事をよく親に話すのですが、親は最後まで話を聞いてくれます。そして僕はいつも、「話を聞いてもらえる」だけで、自分の気持ちに共感してもらえたという安心感が得られます。ところがもし僕が、親にまったく話を聞いて

もらえなかったり、日常的に怒鳴られたり叩かれたりしていたら、「さびしい」というストレスから心が荒れてしまい、周りに暴力をふるったり、誰かをいじめていたかもしれません。

そう考えると、話を聞いてくれる人は、本当にありがたい存在だと思います。話を聞いてくれる人がいるという事実だけで、「自分は一人ではない」と感じられ、いじめる側も人を攻撃しようとする気持ちはなくなり、いじめられる側も、日々を生き抜くための力になると思います。真剣に最後まで人の話を聞くというのは案外難しいです。けれども、話を聞くことで、みんなの今まで知らなかった性格や良いところが、新たに発見できるかもしれません。また、それだけでなく、話を聞いてあげるだけで、誰かの悩みや迷いが整理されたり、誰かの心が軽やかになったり、誰かの何かの役に立っているかもしれません。

だから僕は、これから「聞き上手」になろうと思います。話を聞いていれば、そのなかに、自分の考えや自分の価値観と合わないなと感じる部分があるかもしれません。それでも、それを否定したり反論したりせずに、まずは、最後まできちんと話を聞こうと思います。そして、僕が相手の話を最後まで真剣に聞くことを続けたら、それを見て同じように「聞き上手」の子が一人でも増えるのではないかと思います。

「聞き上手」の子がどんどん増えて、クラスのみんな一人一人が楽しく学校生活を送ることが出来ますように。

小学生の部

全国連合小学校長会会長賞（優秀賞）

少しの思いやりで少しの勇気を

千葉県千葉市立都小学校　六年　宮前（みやまえ）　奈央（なお）

夏休みに入り、中学生が数年前に、見ず知らずの女性を殺害したというニュースを見ました。そして、そのニュースの中で、ひ害者のお母さんが、自分のむすめを何度もさして殺した加害者の少年に、厳しい刑を望んでいることを知りました。私は、自分とあまり変わらない年齢の少年が加害者で、あまりに残にんな事件を起こしたことに、とてもショックを受けました。そして、数日後に言いわたされる判決が気になって仕方がありませんでした。その判決が、一生刑務所に入っていてほしいと望むお母さんの気持ちを反映したようなもので、私は少しほっとしました。少年院を退所してすぐ今回の事件を起こしたことや、罪と向き合う時間があったのに、向き合う兆しがなかったことを考えても、当然受けるべきばつだと思います。亡くなった人は生き返らないのですから。

しばらくして、世の中、こんな事件や人ばかりなのかと気が重くなっていた私に、母が「事件や事故を起こしても、きちんと反省したり、こう生したりする人はたくさんいると思うよ。」と話しかけてきました。そういえば……と、最近となりのクラスの男の子に声をかけられたことを思い出しました。私が二年生の時に、ろう下を走ってきたその子にぶつかり、顔にけがをしました。何針もぬい、だいぶうすくなってきたものの、まだしっかり傷あとが残っています。とつ然、「あの時はご

めんね。まだあとは残ってる?」と話しかけられ、つい私は「だいぶうすくなってきたから大丈夫だよ。」と言ってしまいました。何年も前のことなのに、申し訳なさそうに近づいてきたその子に、「ほんと、まだこんなに傷あとが残っているわよ」とは言えなかったし、そんなことをいう気も起きませんでした。傷あとは消えなくても、反省している人を許したり、申し訳ないという気持ちを理解したりすることは大切ではないのかなと思ったからです。

殺人を犯してしまった中学生の少年のように、犯罪や非行に走ってしまった人が、刑務所や少年院を出た後に、また同じような罪を犯してしまうことは少なくないと耳にします。みんな反省して、気持ちを新たに人生を再出発させようとちかったはずなのに、なぜまた同じことをくり返してしまうのか、なんだかとても悲しくなります。調べてみると、お金や住居の問題で、早々と生活に行きづまってしまい、やり直したいという気持ちだけではどうにもならなくなることが分かりました。また、さまざまな支援策やサポートも、まだまだ必要としている人たちに行き届いていないようでした。

私たちが安心して生活していくためにも、罪を犯した人たちが自立した生活を送り、再び犯罪に手をそめてしまうことがないように手助けしていくことは、とても重要なことだと思います。私は、今回友達とのやり取りで、いけないことをしてしまったと反省して素直に謝る気持ちや態度をとっている相手に対して、それを素直に認めて受け入れる気持ちが大切だということを実感しました。犯罪の大小に関係なく、罪を犯した人と私たちが一緒に暮らしていく中で、私は、「犯罪者は根っからの犯罪者」だと決めつけたり、へん見の目で見たりするのではなく、新しい出発に一人で立ち向かおうとしている人たちに、少しでも勇気をあたえられるように、手を差しのべたり声をかけたりすることのできる人になりたいと思います。そして、どんなときも、みんなが今より少しずつでも他人を思いやって、今よりもっと優しくてあたたかい未来になったらいいなと強く思います。

小学生の部

全国連合小学校長会会長賞（優秀賞）

ぼくが考える社会を明るくする運動

香川県丸亀市立郡家小学校　四年　香川（かがわ）　遥太（はるた）

「社会を明るくする運動って、どんな運動なん？」

ぼくの学校では、夏休みに作文を書く宿題がでます。いくつかあるテーマの中から、自分が書きたいものを選ぶのですが、その中にあった「社会を明るくする運動」という言葉が気になりました。お母さんに聞くと、

「自分で調べるのが一番！」

という返事が返ってきたので、インターネットで「社会を明るくする運動」とけんさくしました。そして、法むしょうのきっずるーむにあるこう生ペンギンのホゴちゃんの物語にたどりつきました。そのページを見ているとお母さんが、

「遥太のおじさんは、クジラ先生と同じ保護司なんだよ。」

と教えてくれました。今度は、保護司が気になりはじめました。お母さんに聞くと、また、

「自分で調べるのが一番！」

という返事が返ってきたので、おじさんにインタビューをすることにしました。

まずは、保護司がどんなことをしているのかを聞きました。はんざいやひ行をした人のこう生や

社会ふっきのお手伝いをしているボランティアだそうです。ぼくは、はんざいやひ行をした人と関わるのは、少しこわいと思いました。そのことを伝えると、おじさんは、

「はんざいやひ行をした人、全員に共通して言えることは、はんざいをやりたくてやったひとは一人もいないということだよ。人間関係がうまくいかない、どうしてもお金がないなどの生きづらさから、はんざいをおかしてしまうことがあるんだよ。」

と、話してくれました。ぼくは、その話を聞いて、それは、はんざいをした人も、心の底から悪い人はいないということだと感じ、安心することができました。でも、どうして、いけないことだと分かっていても、悪いことをしてしまうのかふしぎに思いました。

ぼくは、人前で自分の気持ちを伝えるのが苦手です。じゅぎょう中、発表したいと思っても、きんちょうして手をあげられません。ほかの人からしたら、人前で話すことは大したことではないかもしれませんが、ぼくにとってはハードルが高く、そんな場面になるとなんだか生きづらく感じます。でも、ぼくの周りの友だちも先生も、家族も大ぜいの前で発表することが苦手なぼくをせめる人は、一人もいません。じゅぎょうさんかんのときに発表できなかったことを気にしていたら、さんかんに来てくれたお父さんが、

「発表が苦手な遥太も遥太だから、だいじょうぶだよ。」

と、話してくれました。ぼくの苦手なことも受け入れてくれていると知って、安心することができました。

ぼくは、どうして、はんざいやひ行をしてしまうのか、すべての気持ちをりかいすることはできません。でも、その人が感じている生きづらさを受け入れてくれる人が周りにいたら、生き方が変わるのかも、と考えられるようになりました。

はんざいやひ行をした人は、自分のことをあた

たかく受け入れてくれる保護司と出会えることで、心がほっと安心できると思います。おじさんも、自分が関わることで、何もかも信用できず後ろ向きだった人が、前を向いて生きようと思ったり、新しい仕事を見つけて働いたりしているすがたを見ることが、保護司のやりがいだと話してくれました。

ぼくは、社会ふっきをめざしている人をささえられるように、たくさんの保護司がいたらいいのにな、と思いました。でも、保護司の数はへっていて、高れい化も進んでいるそうです。おじさんも、いつもは別の仕事をしているので、保護司として活動するために、仕事の時間を調整しています。自分がたんとうする人と、もう少しゆっくり時間をかけて関わることができたら、もう一度、はんざいやひ行をしてしまう、さいはんのよぼうにもつながると思うんだけどな、と話してくれました。

今すぐに、ぼくは保護司になって、活動することはできません。でも、ぼくにも周りの人を受け入れることはできます。その人の苦手なことを受け入れる、つらい思いをしている人の気持を受け入れる、自分とちがう考えも一度は受け入れる。ぼくが受け入れることで、周りの人が笑顔になったり、安心したりできるといいな、と思います。

今のぼくが、

「社会を明るくする運動って、どんな運動なん？」

と、だれかに聞かれたら、

「みんなが受け入れられて、ほっと安心できる気持ちを広げていく運動だよ。」

と自信をもって答えます。

中学生の部

全日本中学校長会会長賞（優秀賞）

一人一人が大切だから

栃木県下野市立南河内第二中学校　三年　長谷川（はせがわ）　陽南（ひな）

「お母さん、保護司ってなあに？」

「保護司はね、犯罪をしてしまった人が、また世の中で働いたり、活やくしたりするのを助ける人。」

「怖くないの？」

これは、私が小学校低学年のときに、母とした会話だ。大姉という、いつもお菓子や本を送ってくれるおばさんについて、聞いたのだ。先日も、おいしいアイスクリームが届いた。大姉は、私の祖父の兄弟の一番上の姉だ。大姉には、生まれつき左目の周りに青あざがある。母親が、妊娠中に、転倒してしまい、打ち所が悪く、できてしまったものだ。大姉の父である私の曾祖父は、娘の顔を見て、将来をとても心配したという。しかし、大姉は、とても努力家で、優秀な人で、教師になった。退職後は長く、保護司を務めていた。現在も元気に過ごしている。大姉が、知人から保護司の推薦を受けた際、家族に相談したところ、大反対されたという。犯罪をしたような人に関わると、保護司本人だけでなく、その家族も危険なことに巻き込まれるのではないかと考える人は多い。しかし、曾祖父は、

「やりなさい、人生に無駄な経験はないよ。いつか、きっとそれが役に立つ時が来る。」

と言い、背中を押してくれたそうだ。大姉は、保護司をしている中で、なぜ周りは、犯罪を止めてやれなかったのか考えたそうだ。そして、犯罪

をしてしまった人が子供だったころは、希望や夢を持って、毎日過ごしていただろうと思ったという。みんな、私たちと変わらない時があったのだ。悪いことをしてはいけないのは、当たり前のことだ。しかし、育った環境や社会の背景など様々な事情で、人間は、いつ間違ってしまうか分からない。誰もが、もしかしたら、罪を犯してしまうかもしれない。それをふみとどまらせるのが、周りの人々とのつながりだと思う。そして、犯罪をしてしまった人の更生を助けるのも、人々とのつながりだと思う。しかし、犯罪をしてしまった人に対して、怖いという不確実なものがその人の更生をさまたげていると思う。私は、犯罪をしてしまった人を差別する人は、もしかしたら、その人たちをもう必要のない「無駄な人」だと思っているのではないかと思う。大姉が生まれた時、曾祖父は、目にあざがあるという理由で、後ろに引っ込んでしまうような子になってほしくない、ふつうに、社会に出ていけるような子になってほしいと思ったそうだ。当時はまだ、ハンディを抱えた子供や家族を隠したりする風潮が残っていたらしい。でも、大姉を積極的に人前に連れ出し、興味のあることには、何でもチャレンジさせた。兄弟の中で唯一、大姉だけが幼稚園に通ったという話もあるくらいだ。曾祖父が、大姉が保護司になることを相談した時に、

「人生に無駄な経験はないよ。」

と言ったのは、

「世の中に必要のない、無駄な人はいないよ。」

という意味でもあるのではないかと思う。無駄な人は絶対にいないからこそ、更生をすることも、ハンディを乗り越えることもできると信じていたのだと思う。そんな中、社会で活やくするようになった大姉に、改めて伝えたかったのだと思う。曾祖父は、私の親である孫たちが、失敗したり、挫折したりすると、こんな言葉をかけていたそうだ。

「そんなに落ち込むことはないよ。人間は、最後に帳尻を合わせればいいんだからね。」

これは、孫たちだけでなく、犯罪をしてしまった人、ハンディを抱えている人、何か失敗をしてしまった人、全ての人に通じると思う。間違えたら、修正して、前を見て、無駄なことは何一つない。そう考えて、私も、生きていきたい。

中学生の部

全日本中学校長会会長賞（優秀賞）

勇気の道しるべ

新潟県柏崎市立第三中学校　二年　品田（しなだ）　玲菜（れな）

「優しい子だと思っていたんですけどね。」

ニュースでよく聞く、罪を犯した人への印象を話した言葉だ。

私は、この言葉に疑問を感じる。「優しい子」だったのなら、非行に走ったり、警察に捕まるほどの事はしないのではないだろうか。そもそも、悪い考え自体、そんな子には浮かばないのでは、と。テレビや新聞には、毎日と言っていいほど、悲しい事件が報道される。私は、どんな事件にも、犯人はなんて恐ろしい人なんだ、と無条件に決めつけてきた。しかし、優しい人がする犯行とは、なんだろうか。するのであれば、なぜ、そんな人が罪を犯してしまうのだろうか。私には、そのことについて心当たりがある。

雲行きが怪しい日、私は、祖母と外食に出かけた。久しぶりに祖母に会えて、浮かれた気持ちでいた。店内には家族連れなどがいて、結構混んでいた。雰囲気も良くて、その中にいた、何も気に留めなかった人達の中に、あんな事をしてくる人がいるとは、誰も思わなかった。食事を終えて店を出たとき、空は黒く、雨が降り始めていた。私達は持ってきておいた傘で、歩いて帰ろうとし

た。…しかし、傘がない。忘れたはずがない。慌てて周囲を見渡した。すると、私の傘を差して歩いていく人が、遠くにいるではないか。緊張した。声も足も出なかった。半分諦めて、ぼんやり自分の傘を見ていた。その時だった。

「ちょっと、それうちの傘！」

祖母は、いつもの穏やかな声からは到底想像ができないような、張り上げた声を放った。遠くの人が、驚いて振り返った。私も驚いた。大声に、と言うより、犯行を止めるという行動にだった。同時に、あの人が逆上して襲ってきたらどうするんだと思った。しかしそんな事はなく、怯えた様子で、ごめんなさい、とその人は私に傘を返した後、足早に去っていった。今思えば、祖母があの場にいてくれて良かった。祖母がいてくれなければ、傘を盗まれて、もやもやした気持ちで、一日を終えなければいけなかっただろう。そして、傘を盗んだ人も、「優しかった」人に、成り下がってしまっていただろう。

その後、雨の中を歩きながら、祖母はこんな話をしてくれた。

「ああいう、生き方が分からなくなってしまう人はたくさんいる。そのもどかしさや苛立ちを、悪いことで発散しようとするんだ。一度してしまったら、やるのに抵抗感も無くなっていくし、それで社会に認められなくなって、生きづらくなる。そしてまた悪いことを繰り返す、嫌なループができてしまうんだ。」

私の傘を持って歩いていく人のことを思い出した。なぜか気弱そうな、寂しい背中を記憶していた。祖母は続けた。

「そういう人こそ、生きづらさを知っているんだから、優しくなれると思う。ループから抜け出す正しい道を教えて、受け止めて、許すことが私達にできること。」

はっとした。そして、考えた。テレビに映る、パトカーに乗った、暗い顔をした人達。少し生き方が違えば、優しくなれた人達だったのだ。少し

の声の有無で、道を間違えてしまうのだ。しかし、その後その人がどうなるかなんて、私達には決められない。結局はその人の人生だから。祖母の話を聞いて、罪を犯してしまう心理が、少し分かった気がした。

そして祖母は、悪いことが起きた時には、いつも笑って、私にこう言う。

「いい子でいてね。」

その言葉を聞くと、犯罪を身近に感じずにはいられなくなった。それはどこか遠い所で起きることではなく、もっと近くの、周りの人がしてもあり得ることだと感じた。

自分にも、生き方が分からなくなる時が来るだろう。その時、人に声をかけられて気づく前に、自分からできることは何か、考えた。

それは、周りに相談することだと思う。思い起こして見れば、今自分の周りには、家族、友達、先生、悩みを話せる人達がたくさんいる事に気づく。一人で抱え込まず、周りに相談することで、きっと少しは楽になれるはずだ。そして、悩んでいる人に気づき、声をかけることも大切だと思う。たとえ、罪を犯そうとする人でも、犯した人でも、「怖い人」と決めつけずに、人生に気づきを与えることができたら、社会はもっと明るくなれると思う。

もうこれ以上、優しい人が、「優しかった人」にならないように、私は、少しの勇気で、道を教えられるように、必ずなりたい。

中学生の部

全日本中学校長会会長賞（優秀賞）

刑務所見学から学んだこと

島根県浜田市立旭中学校　二年　竹田（たけだ）　凪沙（なぎさ）

私は、父が刑務官なので、刑務所のすぐ近くに住んでいます。そこの刑務所で、刑務所の中を見学できるというイベントがありました。私は、父が仕事をしている職場に興味があったのでそのイベントに参加してみました。

私はそのイベントで、とても印象に残ったことがありました。それは、服役中の受刑者が過ごしている居室のドアが内側から、つまり、受刑者が自ら開けられる仕組みになっていたことです。その仕組みを説明してくださった方が、

「他の刑務所にはあまりなく、うちの刑務所だけなんだよ。」

とおっしゃっていました。私はその話を聞いた時、自分で開けられるなら脱走をしたりする人もいるのではないかと思いました。

そんな不安な気持ちになった私は、

「ドアが自分で開けられるなら、脱走をする人もいるんじゃないの？」

と、父に言ってみました。すると父は、

「自分でドアを開けられるほうが信頼されている感じがしない？だから、その期待に応えようとするんじゃない？」

と、返してくれました。確かに、もし私が受刑者だったら、ずっと部屋の中に閉じ込められているときより、自由に外に出られたほうが外に出たいと思う事も少なくなり、脱走をしないかもなと思いました。また、その仕組みのほうが社会に出て行ったときも立ち直りやすくなるのかなと思いました。だから私は、その仕組みは受刑者の方のためにとてもいいと思いました。

また、その刑務所では、服役中の受刑者が野菜作りやパン作り、介護福祉の職業訓練、工場で物を作る職業訓練など、社会に戻ったときにちゃんと仕事ができるように職業訓練をしているそうです。私も、訓練生が作ったトマトやパンをよく食べます。最初に訓練生の方が作ったトマトやパンを食べたときは、受刑者の方が作ったということで、食べるのが少し怖かったです。でも、トマトは他のトマトと比べてもとても甘いし、パンもとてもおいしいので、私はすぐに、刑務所で作られるトマトやパンが大好きになりました。今では、「今日は、訓練生の方が作ったトマトだよ。」と母に言われたときはとても嬉しく、いつも楽しみにしています。

こういった活動をしていくことで、刑を終えた受刑者はちゃんと社会になじめるようになると思うし、ちゃんと働いていくこともできるようになると思うので、こういった活動はとてもいいなと思いました。また、囲いの中で過ごしているだけだと、受刑者の方もストレスがたまると思うけど、頭や体を使って仕事をしたら、受刑者の方のストレス発散にもなるので、職業訓練はとてもいいなと思いました。こういった活動でも脱走する確率は下がっているのかなと思いました。

以前、実際に刑務官の方が私の学校に来てお話をしてくださったことがありました。そのときに、とても印象に残った言葉がありました。それは、「刑を終えて、社会に戻ってきた時の周りの人の対応が大事なんだよ。もし、社会に戻ってきた時に冷たい反応をされたら、もう一回犯罪を起こしてしまうかもしれない。だから、周りの人が受け入れてあげることが大事なんだよ。」という言葉でした。

私は、はっとしました。今まではそんなことを考えたことがなかったからです。でも確かに、もし私が刑務所から出てきたときに、周りの人に冷たくされたら、いろいろなことが嫌になって、もう一度、罪を犯してしまうかもしれないと思いました。だからこれから、私の周りにもし刑を終えて社会に出てきた人がいたら、怖がらずに普通に接したいなと思いました。でも、最初は怖いと思ってしまうかもしれないけど、刑務所から出てきた人もちゃんと更生しようと思っていると思うので、怖からずに自分から話しかけたいなと思いました。また、私だけではなくみんなが、刑を終えて社会に戻ってきた人に普通に接して刑務所から出てきた人が同じ犯罪を繰り返さない世の中になってほしいです。

小学生の部

全国保護司連盟理事長賞（優秀賞）

つながりを感じられる社会に

和歌山県橋本市立高野口小学校　六年　和田（わだ）　希良々（きらら）

私は、夏休みに一さつの詩集を読みました。その詩集は奈良少年刑務所に収容されている少年達が書いた詩です。私は少年刑務所があることをその時初めて知りました。

少年達が書いた詩は、どの詩も今の自分の気持ちを素直に表現していて、過去に犯したあやまちを反省する詩や親に対する感謝の気持ちを書いた詩もありました。

私は、なぜこんな素直な心を持った少年達が犯罪や非行をしたのか不思議に思いました。詩を書くことで少年達の立ち直りを目指すプログラムの中で、ある日「ぞうさん」を題材にした授業で、みんな歌い始めたのに、歌わない少年がいました。なぜなら「ぞうさん」の歌を知らないまま育ってきたからです。彼は、幼稚園も、小学校も行っていないそうです。私は、どんなにきびしい環境で育ってきたのだろうと、とても悲しい気持ちになりました。

犯罪は決して許されるものではないけれど、少年達の育ってきた環境がもう少し違っていたら、犯罪を犯していなかったかもしれません。少年達は、自分の詩を授業の中で発表し、共感してもらった

り、認められることによって自信を持ち、立ち直っていきます。困った時に相談に乗ってくれたり、うれしい時に一緒に笑ってくれたり、悲しい時に一緒に泣いてくれる、少年達の周りにもしそんな人たちがいてくれたらどんなに幸せで心強かっただろうか。私は、家族や友達などたくさんの人たちに支えられています。これは当たり前のことではなくてとても幸せなことなのだと改めて思いました。

人と人とのつながりが薄れたり、無関心が孤独を招き、犯罪につながるならば、少年達は社会の中では被害者なのかもしれない。そうならないためにも「つながり」のある社会をつくることはとても大事だと思います。

少年達を立ち直らせるために大事なことは、彼ら自身が変わることとともう一つは、少年刑務所の門を出た後、彼らを温かく受け入れてくれる社会があることです。

「自分は大切な一人」だと思い、「つながり」を感じられる社会を作ることを、一人ひとりが自覚し、大きな輪となって広がっていくことを私は願います。

小学生の部

全国保護司連盟理事長賞（優秀賞）

私にできること

長崎県雲仙市立大塚小学校　六年　柿川（かきがわ）　里奈（りな）

「いらっしゃい、よく来たね。」

笑顔で迎えられました。温かくおいしいご飯を食べさせてもらい、帰りにはお土産まで頂きました。とても居心地が良く、また行きたくなりました。

その場所は、『こども地域食堂ちびっこレストラン』私の父は、福祉の仕事をしています。その父に連れられて行ったのです。

「なぜ、こんな場所があるの？」と父に尋ねてみました。地域の人や子どもたちに安心できる場所を作るため、ボランティアでしてくださっているのだそうです。その時は、こんな場所もあるんだなと思っただけでした。

それからしばらくして、幼い子どもが親から放置され、食事もできずに亡くなったという事件を新聞で読みました。とても驚きました。苦しみながら亡くなったその子のことを思うと悲しくてたまらなくなりました。その時、『ちびっこレストラン』のことが頭に浮かびました。

「困った時にいつでも遊びに来て欲しい。」

そう言われていました。初めて行った場所なのに、なぜか温かい気持ちになったのを覚えています。

虐待をする親の中には、ストレスを抱えていたり、生活に困っていたりしていると新聞に書いてありました。もし身近に『ちびっこレストラン』のような場所があれば、味方になり助けてくれる人がいれば、親は孤立することなく犠牲になる子どもも出なかったかもしれません。地域のつながりは、とても大切なものだと感じます。

またある時、テレビで少年犯罪を犯して長い間刑務所に入っていた人が、社会に出てもまた刑務所に戻ってしまうというニュースを見ました。その理由は、社会になじめないことと偏見や差別を受けてしまうからでした。私も罪を犯した人は怖いと思ってしまいます。もちろん罪を犯したことは、悪いことです。でも、それを反省し、新しくやり直そうとしているのに、周りが邪魔をしてはいけないとも思いました。

私の祖母は、更生保護女性会の会員です。犯罪や非行をしないように呼びかけたり、そうなってしまった人を支えたりする活動をしています。例えば、生活用品や食品などを更生施設や児童養護施設に届けています。また、『長崎ひまわりプロジェクトうんぜん』として、ひまわりの種や苗を学校や道路沿いの花壇に植えています。これは、地域が明るくなるようにしているそうです。

私は、ちびっこレストランや更生保護女性会のように、誰にとっても安心して住みよい社会になるために活動してくれている人たちがいることを初めて知りました。私の周りにも、登校時に安全を見守ってくださっている地域の方がいます。これまであまり気にとめていませんでしたが、支えられていることに感謝の気持ちでいっぱいになりました。そして、私には何ができるのだろうと考えるようになりました。

そこで、この夏休みに子ども会で『フードドライブ』という活動をしました。これまでは、バーベキューやレクリエーションなど自分たちが楽しむことばかりでした。また、新型コロナが流行して、何も活動しない時もありました。今年は私が

子ども会会長なので、何かできることはないだろうかと両親に相談しました。そこで知ったのがこの『フードドライブ』です。

『フードドライブ』とは、家にある食料品を集めてフードバンクに渡す活動です。集まった食料品は、本当に必要な人に届けられるそうです。確かに、家にも食べきれない食料品があります。これなら子どもの私にもできそうだと思いました。

夏休みの公民館に、たくさんの食料品が集まりました。それを賞味期限が二ヶ月以上残っているか、常温で保存ができるものか、開封されていないかなど手分けして調べていきました。種類ごとに数を表にまとめました。この食料品が誰かの役に立つと思うと、とてもワクワクした気持ちになりました。

他にも私にできることを考えてみました。それは、『あいさつ』です。私から「おはようございます。」と、地域や学校で言うようにしたいです。よく知らない人に言うのは恥ずかしかったり、勇気が必要だったりします。しかし、あいさつをすると相手と気持ちが通じ合った気がします。あいさつには、人と人をつなげる不思議な力があるんだと思います。

私はこれまで社会で起きる事件は、自分とは関係ないものだと思っていました。でも、悲しい事件を防いだり、失敗した人を許したりすることは、身近なことからでもできるということが分かりました。誰もが笑顔で安心して暮らしていけるよう、これからも私は、自分にできることを考え、実行していきます。

小学生の部

全国保護司連盟理事長賞（優秀賞）

「私を」こばまない明るい社会に

鹿児島県南九州市立中福良小学校　六年　若林（わかばやし）　美優（みう）

「私をこばんできた世界は、私がこばんできた世界」

この言葉が、私の心に残った。どうして「私を」ではなく、「私が」なのか。

これは、第七十二回、社会を明るくする運動のポスターの言葉だ。拒むという言葉もわからなかったので、調べてみた。相手の要求を拒否するという意味だった。

去年から、社会を明るくする運動の出前授業を行っている。保護司の方が二人来てくださった。今年は二回目なので、けいはつ運動をすることになった。ポスターをはったり、ちらしを配ったりする運動だ。

初めに、公民館にポスターをはりに行った。公民館のけいじ板にこのポスターをはったときに、「私をこばんできた世界は、私がこばんできた世界」という言葉に出会ったのだ。

私をこばんできた世界では、周りの人からいやな目で見られたり、こわがられたりしたことがあったのだろう。けいむしょから出てきたら、何か悪いことをまたしそうだなと思う。私だったら、悪いことをしてけいむしょにいた人が近くにいたら、こ

わいと思う。だから、みんなからさけられるのはしかたがない。だから、それが私をこばんできた社会ということだろう。

次に、ＪＡに、ちらし配りに行った。行く前に、動画を見た。そこでは、大きな声で、

「社会を明るくする運動です。よろしくお願いします。」

と言っていた。それを見て私は不安になった。

私には忘れられない出来事がある。一年生の時だ。一年生を迎える会で、私が、

「好きな食べ物は、ナタデココです。」

と言うと、全校のみんなから、

「えっなんて。」

と言われた。私が何度言っても

「なんて。聞こえない。」

のくり返し。私は泣き出してしまい、心配した先生がかけよってきた。私は、はずかしがり屋で声が小さかった。だから、今度も大きな声では言えるか不安だったのだ。

ＪＡでは、予想どおりちらしをわたすとき、大きな声では言えなかった。でも、もらった人は、うれしそうにおれいを言ってくれた。

授業の中では、社会を明るくするために私たち子どもにできることは、すなおに生きることと、友達を大事にすることだと教えていただいた。また、あいさつは大切ということを、くり返し言われた。ちらしを配るときも大きな声で言えば相手の心にもっと届いたのだが、そのときは、気づけなかった。

保護司について調べてみると、岩瀬きぬ代さんのインタビュー記事が見つかった。岩瀬さんは、保護司になる前から、あいさつ運動や花いっぱい運動など、地域の子どもたちのためのさまざまなボランティア活動をしてきた。でも、保護司ではうまくいかないことがあった。ひどくはんこうてきな少年がいて、おどかすようなことを言った。でも、ふしぎにこわいとは思わなくて、ただただかわいそうでなみだが出たということだった。

なぜなみだが出たのか。私は、考えてみたけど、どうしてもわからなかった。そこで、祖母に聞いてみた。すると、

「親の愛情を知らなくてかわいそうだと思ったからだと思うよ。」

と教えてくれた。

その言葉を聞いて、出前授業の話を思い出した。少年院に入ってしまった少年がいた。その少年に面会に行ったとき、思わずごめんねと言ってしまったということだ。それは、

「保護司である私がうまく指導できたらここに来なくてよかったのに、ごめんね。」

という気持ちからだった。

ポスターの最後に、「その人の言葉が、世界と私をつないでくれた」とあった。その人とは、保護司のことだろう。「私を」こばんできたのではなく、「私が」勝手にかべを作って人とのかかわりをこばんでいるのだということを、保護司の方が気づかせてくれた。

出前授業を受けて、いろいろなことを学んだ。五年のときは、保護司という言葉さえわからなかったが、二回目になり、よくわかってきた。悪いことをした人でも、保護司の方と出会ったら自分を変えることができる。保護司はとてもすごい仕事だなと思った。

社会を明るくする運動は、ちらし配りなどのけいはつ運動と、保護司の方による、はんざいを犯してしまった人への働きかけの二つがあると言われた。このような一つ一つの働きかけで、はんざいのない社会をめざしている。そのために、高学年である自分ができること、すなおに生き、友達を大切にし、あいさつをしっかりとしていきたい。

こうして、それぞれは小さなことだが、その積み重ねで、「私を」こばまない、明るい社会にしていくことができたらいいなと思う。

中学生の部

全国保護司連盟理事長賞（優秀賞）

偏見を洗い流すブルースティック

東京都清瀬市立清瀬第五中学校　一年　田谷（たや）　朋佳（ともか）

私の家が普段使っている襟袖汚れ用の洗濯石鹸は、ちょっと変わっている。その名は、「ブルースティック」。「汚れ落としのスーパースター」と謳われている、名前通り青いスティック状の固形石鹸だ。一見普通に見えるブルースティックの、どこが変わっているかというと、実はこの石鹸は刑務所で職業訓練として作られたものなのだ。私はそのことを知った時、なぜわざわざそれを使うのだろうと疑問を覚えた。私の制服のワイシャツの襟袖汚れでもお世話になっているブルースティックだけれど、刑務所で作られた物と聞くと、あまりいい気持ちはしなかったし、少し抵抗感があった。別に市販のものを使えばそれでいい話なのに。

調べてみると、このブルースティックは横須賀の刑務所で作られているもので、令和元年度には全国で約十万本も売れる程の人気商品らしい。そんなにたくさんの人が買っているとは思わなかったので驚いた。ブルースティックのような刑務所で製作された製品の事は、昔は「刑務所作業製品」、今は「ＣＡＰＩＣ」というブランド名で呼ばれているそうだ。このキャピックの商品を買うことで、受刑者にお金が入ったり、犯罪被害者支援団体や、矯正行政への協力団体に助成が入る。キャピックと名称を変えたのは、刑務所という言葉が偏見につながりやすいという理由からだ。やはり私と同じように刑務所と聞くと抵抗感を持つ

人も多いようだ。

キャピックの商品は幅広く、ブルースティックのような日用品からタンスなどの家具まで様々である。中でも驚いたのは、神輿を作っているということだ。しかし、その神輿が刑務所で作られていると明かされることはない。祭りは『御神事』でもあるので、そこで使われる神輿が受刑者によって作られたとなると、祭りへの偏見につながる可能性があるためだ。ブルースティックも、一見しただけでは受刑者が作ったものだとは分からないようになっている。受刑者が作った物に対する抵抗感というのは大きいのだなと改めて実感した。私自身もそのように思ってしまったけれど、出来栄えや作った物に対する評価ではなく、作った人で評価されてしまうのは良くないと感じた。

しかし、そういった偏見は刑務所で作られた物だけに向けられているのではない。罪を償い刑務所から出てきた人たちにも偏見の目は向けられる。再就職する際にも、前科があるために断られる事が多いという。法務省の犯罪白書によると、出所した受刑者の三十八・六％が五年以内に再入所しており、再犯者の七割が逮捕時に無職だったという。そうやってせっかく社会復帰したのに、仕事が与えられずに自暴自棄となって再犯者になってしまうとすれば、それはとても悲しいことだ。

犯罪をしてしまったことには問題があるし、罰が必要かもしれない。でも、刑務所に入って反省した人に対しても罪を犯したという事実だけを見て、差別や偏見の目を向け、それが結果的に再犯につながってしまう。そうであるならば、その再犯の原因は、刑務所で作った物と聞いただけで抵抗感を覚えてしまう私たちにもあるのではないだろうか。その意識を変えるのは、なかなか難しいかもしれない。でも、だれにだって過ちはある。その人が反省して社会復帰をした時、優しく受け入れ、見守っていく。一人一人がそのような心の余裕を持ち、差別や偏見を無くしていくことが重要なのではないだろうか。

私はまず、ブルースティックを買って社会復帰を少しでも応援することから始めていきたい。そしてブルースティックが汚れを洗い流してくれるように、多くのキャピックの商品が、私たちの偏見の心を洗い流してくれるきっかけになればいいなと思う。

中学生の部

全国保護司連盟理事長賞（優秀賞）

「私の第一歩」

香川県三豊市立詫間中学校　三年　林本（はやしもと）　結宇（ゆう）

テレビや新聞で毎日のように報道されている様々な事件。殺人、傷害、窃盗、詐欺など事件の種類は多岐にわたる。最近特によく耳にする「あおり運転」。数日前のニュースで見たあおり運転で捕まった犯人は、東京・池袋の暴走事故で妻子を亡くした遺族をSNSでひぼう中傷した男だった。事故で家族を亡くした遺族に対して心ない言葉を浴びせた男。なぜ、一人の人間がいろいろな事件を起こすのか。なぜこの社会では同じような事件が繰り返されるのか。

そんな疑問を抱いたとき、ふと、小学生の時にみたドキュメンタリー番組を思い出した。草刈健太郎さんの「職親プロジェクト」というドキュメンタリー番組だ。元受刑者の就労を支援するため、関西に拠点を置く飲食店や建設会社、美容室などが日本財団（東京）と協定を結んで始めた「職親プロジェクト」。犯罪者の再犯を防止するため職と住む場所を提供する、特に身寄りのない元受刑者のまさに親代わりとなって居場所を作るというものだ。「里親」という制度は聞いたことがあったが「職親」という制度は、聞いたことがなかった。

調べてみると、日本の検挙人数は二〇〇四年の三八九〇二七件から減少し続けている一方で、再犯者率が一九九七年には二七・七％であったが、二〇一九年には四八・八％と上昇し、過去最悪となっていた。また、再犯者の約七十％が無職で、約二

十%が住所不定、仕事のない人の再犯率は、仕事のある人の約三倍もあった。それほど高い再犯者率の日本の未来を変えるべく立ち上がったプロジェクトがこの「職親プロジェクト」だったのだ。

私が番組を見て受けた一番の衝撃は、職親プロジェクトを進める草刈さんがアメリカで妹を殺された被害者遺族であったこと。殺してやりたいとまで憎んでいた加害者を助ける立場にたっていること。なぜ、加害者にそこまでする必要があるのか。人に迷惑をかけて傷つけてきたはずの人たちに…。

草刈さんが直面した更生の難しさ。少年院を出た少年たちは、雇ってもすぐやめてしまったり、先輩のお金を盗んだり、薬物に手を出したり…。でも、草刈さんはあきらめなかった。なぜなら、少年たちは親に見捨てられたり、教育を受けていなかったりした子が多く、社会的被害者だと気付いたからだ。そしてそこには、「反省は一人でもできるが、更生は一人ではできない」という職親プロジェクトの理念があった。

社会的被害者だからといって、罪を犯していいわけではないはずだ。それでも、罪を犯したのがこの社会なら、罪を償うのも私たちが住むこの社会なのだ。社会が…そして私たちが偏見をもって接することで、加害者だった人たちを孤立させ、再犯へと導いてしまっているのではないだろうか。

では、社会的に未熟な私に、一体何ができるだろうか。これから先、更生した人と出会ったとして、偏見の目を持たずに接する事ができるだろうか。正直、自信はない。それでも、人々が集まり、生活を営み、自分がしたことが少なからず周りの人に影響を与えたり、与えられたりしながら、生きているのだから自分ができることをしていきたいと思った。草刈さんのように、「親になる」ような、大きなことはできないけれど、親身になって相談にのってあげることはできる。挨拶だけでもいい。声をかけることで、何か影響を与えて、変化を与えてあげることができるかもしれない。もしくは、支えてあげることができるかもしれない。

「職親プロジェクト」を知ったことで、加害者への見方が変わるいい機会となった。一方的に犯罪者だからと責めるだけでなく、社会の一員として、受け入れることの大切さに気付いた。明るい社会へとつながる私の第一歩となった。

中学生の部

全国保護司連盟理事長賞（優秀賞）

みんなが輝ける社会を目指して

鹿児島県奄美市立朝日中学校　二年　川節（かわせつ）　桃香（ももか）

「真っ赤な顔に小さな手足。気持ちよさそうに眠っているかわいらしい姿を新生児室のガラス越しに見たのが妹との初対面でした。」

これは姉が中学生のときに書いた作文の書き出しです。この赤ちゃんとは私のことで、作文には私が生まれてくるまでのこと、母の体調が思わしくなく入退院を繰り返していたこと、入院中残された父、姉、兄の三人での生活の大変さ、そして私が生まれてきたときの嬉しい気持ちが細かく書かれており、私の知らない当時の家族の様子を感じることができました。

私には生まれてきたことを喜んでくれ、生まれてからずっと大切にしてくれる家族と過ごすことがあたり前の日常でしたが、みんなが決して同じではないと感じる出来事がありました。それは、夏休みも終盤の頃テレビから流れてきた「中三の女子生徒が渋谷で面識のない親子を刺し現行犯逮捕」という衝撃的なニュースです。事件を起こした女子生徒は、あとで自分の母親と弟を殺すための演習でこのようなことをしたと話していたそうです。私はこのニュースを見て、とても心が苦しくなりました。それと同時に私と一つしか学年の違わない彼女にいったい何があったのだろうか。そこに至るまでに何かできることはなかったのだ

ろうか。いろんな思いが頭を駆け巡りました。人は自分の気持ちを理解してくれる人がいない、イライラしたときにうまく対処できない、孤独や絶望感を感じたときに自暴自棄になって犯罪や非行に走ってしまうのではないのでしょうか。私は思います。もちろん、誰にでも苦しみや悩みはありますが、まわりには必ず悩んでいる人を理解し、支えてくれる人がいるのだと。親、きょうだい、友達、先生、地域の人など話を聞いてくれる人、聞いてくれる場所がすぐそこにあるという安心感。そして、あなたは大切な存在なんだと思える瞬間がきっとあります。

私の母は小さいときからいつも

「桃ちゃん生まれてきてくれてありがとう。」

という言葉を口にします。小さいときは特に気にも留めず、また言ってるなと聞き流していた言葉でしたが、中学生の今では人前で言っているのを聞くと少し照れくさいと思うときもあります。しかし、中学生の今だからこそ感じます。母の口にする「生まれてきてくれてありがとう」の言葉の中には「あなたはかけがえのない存在。大切な命なんだよ」という意味が込められているのではないのかと。

私は一人一人が誰かに大切にされていると実感し、希望をもてる社会づくりが犯罪や非行防止に繋がるのではないか。そして、一人一人がお互いを受け止め、認め合い、理解し合うことが大切なのだと思います。「みんな違ってみんないい」これは私の祖母の大好きな言葉です。自分と同じ人は一人もいません。だからこそ一人一人がお互いを受け止め、認め合い、互いにかけがえのない大切な存在だと思えるような信頼関係を築いていけたらなと思います。今あなたの周りの人は笑顔でいますか。そして、あなた自身は笑顔で毎日過ごせていますか。あなたの周りの小さな輝きから、やがて社会の大きな輝きへと広がっていくのではないのでしょうか。そして、私は自分がしてもらったようにあなたは大切な存在なんだよと優しく伝えることのできる人間になりたいと思います。私の周りの輝きがより大きな光となり、一人一人が輝き続けることのできる未来を目指して。

小学生の部

日本更生保護女性連盟会長賞（優秀賞）

独りぼっちにさせない

北海道札幌市立稲積小学校　六年　鎌口（かまぐち）　栞奈（かんな）

加害者…他人に危害や損害を加える人。
被害者…犯罪によって危険を受けた者。
犯罪……法律に違反して罪を犯す事。

私はこの作文を書く時に、まず色々な言葉を辞書で調べました。普段ニュースなどで耳にする事はあってもちゃんと向き合って考えた事はなかったからです。するといくつか、疑問が浮かんできました。

「犯罪を犯す人とそうじゃない人。」ここにはどんな違いがあるのだろう。もちろん、悪い事をしてはいけない、人を傷つけてはいけない、という事は子供の私にもわかります。では犯罪がなくならないのはなぜでしょうか。

私の祖父は二十年間、保護司の活動を続けています。初めてその話を聞いた時、「加害者と関わる事はこわくないの？」と祖父に質問しました。すると「こわくないよ。皆同じ人間だからね。」と祖父は言いました。その言葉を聞いた時、私はおどろきました。犯罪者のイメージは、私の中で、ただ「悪い人」でしかなかったからです。祖父はこれまで沢山の加害者達と接してきて気づいた事があるそうです。それは、親が無責任、家庭が崩

壊している場合が多くを占めているそうです。つまり、初めから犯罪に手を染める人間はいない。育ってきた環境が大きく影響しているという事だ。

私には嬉しかった気持ちを共感してくれる友達、辛い時に話を聞いてくれる家族がいます。それらは今まで、当たり前にある、私の居場所です。でもそれは、決して当たり前ではないのだと感じました。普通では考えられないような環境の中で生活を送っている人もいます。そんな人達が孤独を感じ、誰にも相談できず、非行に走り犯罪を犯してしまったら?その人だけを責めて、罰をあたえる事が正解なのだろうか?もちろん被害にあった人達の傷ついた心や体のケア、サポートは絶対必要です。一生消えない出来事になると思います。しかし、それと同時に加害者の更生にも目を向け、それに寄りそう社会も必要なのだと思います。寄りそう事を忘れた社会はきっと、再犯を生み、また負の連鎖につながっていくのでしょう。

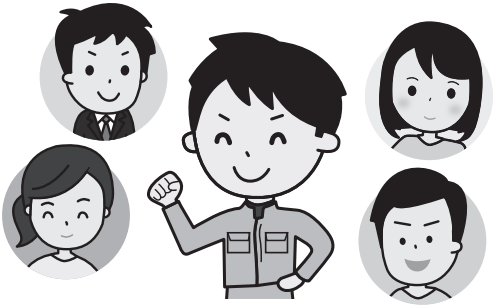
まだ六年生の私には大きな力はありませんが、小さな積み重ねを始める事は出来ます。地域の人達や学校の友達、顔を合わせる人とはしっかりあいさつをします。ちゃんと顔を見ます。目を見ます。「私はあなたを見ているよ。」「あなたも私を見てね。」という意思表示です。独りじゃないよ、というメッセージでもあります。

大好きな友達とケンカした翌朝は、いつも通い慣れている学校が遠く感じ、教室へ行く足が重くなります。そんな時、「おはよう!」って声をかけてもらえるだけで、気持ちが軽くなります。私の心は単純だなと思っていたけれど、きっと「自分は独りじゃない。」と感じたからだと気付きました。私も誰かにそんな手助けになるきっかけを作れたらなと思います。

例えばＳＮＳが発達した現在、悪い事だけではなく良い事もあります。安全性を確認する必要はありますが、誰かに話を聞いてほしい時、近くに

助けを求める人がいない時など、人と人を繋ぐ場所になる事もできます。様々な事情で家でご飯を食べる事ができない子供達に食事を提供する「子ども食堂」、いじめのSOSを受け付けてくれる電話の窓口、この様に色々な形で独りぼっちにさせない社会づくりがこれからもっと必要になってくるのだと思います。

犯罪はダメ、一度なくした信用を取り戻す事は簡単ではないです。でも、その過去ばかりに目を向けるのではなく、立ち直る未来へどうするべきかを考え、自分なりの意見を持ち、次の人へつないで行きたいです。



小学生の部

日本更生保護女性連盟会長賞（優秀賞）

特別な日

長野県上田市立豊殿小学校　六年　戸兵（とひょう）　心瞳（ここみ）

「おかえり。」

私は、「おかえり」という言葉を聞くと心が明るくなります。「ありがとう」という言葉も好きですが、私が一番好きな言葉は「おかえり」です。私にとってこの言葉は、すごく人の温かみを感じ、気持ちを明るくしてくれる特別な言葉だからです。

初めから、「おかえり」という言葉が好きだったわけではありません。本当は大きらいな言葉の一つでした。それは、「おかえり」という言葉は、必ず二人以上の人が必要になります。「ただいま」という帰る人と、「おかえり」というそれを待つ人がいます。帰る人だけでも、待つ人だけでも片方が欠けていれば成立しません。両方がいて、やっと使われる言葉だからです。私は、だれもいない家に毎日帰るのはとてもさびしいと思っていました。それは、「おかえり」と言う返事をしてくれる人がいなかったから大きらいでした。

私にとっての「ただいま」は、だれも答えてくれるはずのない家に帰り、義務的に大声で言う言葉です。それは、小学校一年生の時の防犯教室の授業で、家の中に人がいると思わせるためにだれもいなくても大きな声で「ただいま」ということを教わったからです。なので、私にとって「ただい

ま」という言葉は自分を守るための大切な言葉で、決して心が明るくなる言葉ではありませんでした。今まではかなしい言葉、あまり言いたくないさみしい言葉でした。でも、最近言われてうれしい言葉、気持ちが明るくなる言葉の仲間入りをしました。毎日、じゅ文のように何となく言う「ただいま」という言葉に「おかえり」と返事が返ってくる特別な日があるからです。何の前ぶれもなくその日はとつ然やってきます。それは、お母さんが仕事の昼休みに帰ってきて答えてくれるからです。本当は、うれしいのですが、「何でいるの？」「仕事はもう終わったの？」と冷たく言ってしまいます。心の中では、「明日も特別な日だったらいいな」と思っていますが、なかなか照れくさくてお母さんに伝えられません。

私は、最近あることに気がつきました。それは、お母さんが私の下校時刻に合わせて昼休みの時間を調整していることです。「どうして、こんなおそい時間に昼休み？」「おやつの時間だよ？」と思ったことは何度かありましたが、あまり深く考えていませんでした。お母さんは、「おかえり」を言えるようにひそかに努力をしてくれていました。そんなお母さんの努力に負けないように私も照れずに、今まではあまり話さないでいた学校であった出来事や、自まんしたいことを話したいと思います。

私は「おかえり」といってもらえるささいなことでこんなに心が明るくなると思いませんでした。いやなことがあっても次の日までには気持ちをきりかえることができていると感じたからです。私はこれからも毎日「おかえり」と言ってもらえません。でも、家族が返ってきたら元気よく、「おかえり」と言いたいです。「ただいま」「おかえり」という本当に短い言葉のやり取りができる家族がいることはとても幸せだと思います。

そして、私は特別な日があるから、「おかえり」という言葉の大切さを知ることができました。当たり前と思われる「おかえり」という言葉ですが、私にとっては心をぱっと明るくしてくれる最高の言葉です。

小学生の部

日本更生保護女性連盟会長賞（優秀賞）

支え合って生きていく

愛知県岡崎市立六ツ美中部小学校　六年　段下（だんした）　慶士郎（けいしろう）

今年の春、一年四組に弟が入学してきた。入学式の朝、かっこいいスーツを着て、兄に髪の毛をセットしてもらい、ピカピカのランドセルを背負って、桜の花のように笑顔満開だった。ぼくは、迎える側なので先に登校して、新入生の入学を体育館で待っていた。

「新入生入場」

その声に続いて、緊張している新入生が次々に入ってきた。ぼくは弟の姿を見ようと椅子に座ったまま少し背伸びした。

「あれ？いない…」

弟がいない。弟が座るはずの席は空いたままだった。新入生の名が順番に呼ばれても返事がなかった。式の間、ずっと気になっていた。でも、ぼくには分かっていた。弟はこの特別な空間に入るのが嫌だったんだと思う。いつもと違うことが起こることが苦手な弟だ。

「弟、休んだの？」

友達に聞かれて、答えに結まった。いるはずだけど入れないなんて、なんていえばいいのかな。そのことを言ったら、変な風にとらえられてしまうかな。いろいろ考えたが、

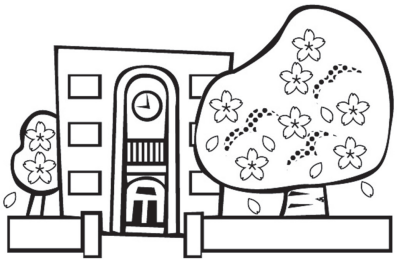
「え、わからない。」
とだけ答えた。友達はそれ以上は聞いてこなかった。
入学式の日は通学団の下校で初めて一緒に帰るはずだったけど、弟はみんなが並ぶ場所には来れなかった。
家に帰ると、元気に笑ういつもの弟がいた。その様子に少しほっとしたのと、大丈夫かなと、複雑な気持ちになった。
「どうしてできないんだろう」
それが素直な気持ちだった。両親からそれが、弟の障がいと聞いていたが、頭で理解しても心から理解するにはぼくにはまだ、その障がいに対する知識が少ないのだと思う。
正直、目の前にいる弟が障がいを持っていることは、両親から聞くまで気づかなかった。なぜならば、生まれてから成長する姿をずっと見てきて、それが弟であり、障がいのある弟なんて見ていなかったからだ。障がいの話を聞いても、ピンとこなかったし、だから何?と思った。
でも、入学式の日、ぼくの弟だけ学校に来ていたのに、入学式に出られなかったことを知り、初めて「障がい」を感じたのだ。だからぼくは、ばく然と不安になった。これから、小学校で弟は、苦しい思いはしないかな。楽しく過ごせるかな。そんな思いで、翌日を迎えた。登校は、班長をつとめるぼくの通学団でいっしょに登校した。母もそっとついてきていた。母がいれば落ち着いていた。昨日は嫌がった下駄箱も、たくさん人がいて最初こそ抵抗したけど、無事に上靴に履き替えて、教室に連れていくことができた。先生も待っていてくれて、ぼくは自分の教室に行った。なんだか朝からぼくが緊張して、少し疲れてしまった。そんなぼくに
「慶士郎の弟、めちゃくちゃかわいいな。新入学生の中で一番かわいい!」と友達が駆け寄ってくれた。
「え?」

思わぬ声掛けにびっくりした。

「一年四組なんだよね。もし、慶士郎の弟をいじめるやつがいたらおれがぶっとばしてやる。」

言葉はすこし乱暴だけど、その思いがぼくはすごくうれしかった。四組は特別支援級だ。僕に何も聞かず、友達が見たままの、ありのままの弟をかわいいと言ってくれた。

弟の障がいは生きづらさを持ちながら、生きていかなければならない。でも、それをまわりがカバーして守っていけば、生きづらさは少し減るのかなと思う。ぼくが友達にかけてもらった言葉は、ぼくの弟を守ってくれるのと同時に、ぼくの心も守ってくれた。友達の言葉は、ぼくに障がいがある人を支えるのは、知識以上に心の広さが大事なんじゃないかと気づかせてくれた。世の中みんなが、人に優しくなれるといいと思う。



中学生の部

日本更生保護女性連盟会長賞（優秀賞）

柴犬サンタと私の散歩道

北海道札幌市立篠路西中学校　二年　村上（むらかみ）　桃音（ももね）

私の家では犬を飼っている。名前はサンタ。人が大好きで、近くに人が来ると玩具を咥えて遊んでほしいとアピールする。

ある春先の、暖かくなってきた頃。春休み中だった私は、サンタと一緒に、散歩に行く事にした。散歩に行くと気付いたサンタは、クルクルと回ったり、繋いだリードを咥えて引っ張ったりして、「早く行こう。」と言っているかのようだった。

道を歩いていると、雪山の隙間に、沢山のゴミが重なるように埋もれている。雪が溶けて、出てきたゴミが歩道にも散らばっていた。点在してるゴミを横目に、しばらく歩いていると、向こうから人が歩いてきた。私は犬が苦手な人もいるかもしれないと、立ち止まり人が通り過ぎるのを待った。歩き始めようとして、サンタを見ると、落ちていたゴミを咥えてこちらを見ていた。サンタは、通り過ぎる人にも、遊んで欲しいと思ったようだった。

私は、咥えていたゴミをまた捨てる訳にもいかず、持っていた袋にゴミを入れた。人が通り過ぎるのを待つ度に、ゴミを咥えて待つサンタ。人が通り過ぎると、寂しそうに私を見上げた。私は、サンタから回収したゴミを袋に入れながら「これ

はゴミだよ。玩具じゃない。」とサンタに強く言った。けれど、サンタは気にせず、私がゴミを袋に入れると、また違うゴミを探し始める。風で動く袋がお気に入りのようで、ゴミを捕まえられた時は、誇らし気な顔をした。持っていた袋は、サンタが捕らえたゴミや、遊んでもらおうと、待ち構えて見つけたゴミで、いっぱいになった。散歩から帰り、母に言うと笑って言った。「サンタはゴミ取り名人だね。」と。私は、道でゴミを玩具代わりにする犬に、悪戦苦闘している姿を人に見られるのが恥ずかしかった。けれど、帰り道が少しだけ綺麗になっていて、心が晴れやかになった気がした。

また、次の日もサンタと散歩に行く事にした。人が通る度に、サンタは変わらずゴミを咥え、人が通り過ぎるのを眺めていた。そんなサンタから、いつもの様にゴミを回収しようとしても、何故か、中々離そうとしない。すると後ろから「あら、偉いねー。ワンちゃんと、ゴミ拾いしてるの?」と声がした。振り返ると、散歩中のおばあちゃんがいた。サンタに気を取られていた私は、他に人がいる事に気付かず、驚いた。サンタはしっぽをブンブンと振り、嬉しそうにしている。緊張屋で人見知りの私は、おばあちゃんに「はい。」と言うことしか出来なかった。おばあちゃんに、「綺麗にしてくれて、ありがとうね。」と言われてはっとした。『他の人からは、ゴミ拾いをしているように見えている。』と気が付き、ありがとうと言われて心がくすぐったく、温かい気持ちになった。散歩中のおばあちゃんの事を、帰ってから母に言うと、母は拾ったゴミを分別しながら「散歩できて、道も綺麗になって、ありがとうと言われるなんて、一石三鳥!。」と笑って言った。私もそんな気がした。

夜になり、父にその話をすると、何処かに電話をかけ始めた。祖父の家だった。私が、生き生きと、楽しそうに話す姿をみて、父は「おじいちゃん、おばあちゃんにも話を教えてあげて」と言い、

受話器を私に手渡した。

祖父に一部始終を話すと、祖父が「月に一度、有志の人が集まってゴミ拾いをしているんだけど、一緒にやらないかい？」と誘ってくれた。私は迷わず「やりたい」と答えた。

ゴミ拾い当日、祖父母や家族以外にも沢山の人が集まっていた。私はサンタとゴミ拾いをした。少しずつしか拾えないけれど、楽しい。そして、歩いてきた道が綺麗になって、気持ちがよかった。サンタも沢山の人に可愛がってもらえて満足そうだった。

ゴミ拾いが終わって、何袋もゴミを集めた人がいた。私は小さな声で「あの人、すごいね。」と祖母に言った。祖母は「あの人はね、刑務所に入った事がある人なんだけれど、誰も見ていないところで、誰よりも頑張る人なんだよ。」と教えてくれた。刑務所と聞いて、怖くて、悪い人ばかりが行く所だと思っていた私は、その人が集めた沢山のゴミ袋を眺めて思った。『悪い人が、皆の為にゴミ拾いする訳がない。怖い人が、自分の気力や体力を使って、これだけのゴミを拾える訳がない』

沢山のゴミを拾ったその人は、当たり前のように、皆が集めた全部のゴミ袋を集め、最後までしっかりと綺麗に片付け、皆から感謝されていた。私はその姿を尊敬した。刑務所に入った事がある人は、怖くて悪い人だと決めつけ、偏見の気持ちを持っていた自分が、すごく恥ずかしくなった。

私は、散歩道で大切な事を学んだ。それは、ゴミ拾いの楽しさや、何かの理由で刑務所に入った事があっても、皆の為に行動が出来る人がいるということだ。そして私は、差別や偏見を持たず、人の良いところを見つけ、温かい心を持つ祖母のような人になりたい。

中学生の部

日本更生保護女性連盟会長賞（優秀賞）

自分を変える

静岡県裾野市立深良中学校　二年　根本（ねもと）　果穂（かほ）

私は常々不思議に思っていることがあります。それは加害者家族への世間の反応です。被害者や被害者の家族が加害者に対して怒りを持つのは当たり前のことだと思います。そして、その人たちに同情する人が多いのも当たり前だと思います。その思いから救われている被害者もいることでしょう。しかし、その同情が行き過ぎているケースも私は多いと思います。もちろん犯罪はしてはいけないし、悪いことですが、犯罪者の家族がバッシングを受けるのは違うと思います。家族の一人が犯罪をしてしまっただけで、その家族の日常が奪われている現実があります。

今は誰でもＳＮＳを使うことができます。そして私自身も使っています。見ず知らずの人ともコミュニケーションが取れるだけでなく、情報を広げることもできます。しかし、そのＳＮＳが時には凶器になることがあります。デジタルの進化は私が思う以上にすさまじく、私自身がその進化に対応できるのか不安です。実際、ＩＴ企業のトップが自分の子どものスマホ使用に関して制限を与えているのは、デジタルの進化に、人間が追いついていけないことを懸念した行動の表れです。そ

の心配は的中し、人間関係における感受性や共感する力という「心」の面が弱体化され、無機質な人間を作り出しています。そんな「心」がむしばまれていることがわかるような記事を見つけました。

ある少年が罪を犯しました。少年犯罪だったため、実名報道がされませんでした。世間は「さらせ！」という風潮が強く、本人が出ないのなら「親を出せ」と言ったり、その家の写真を「ここは犯人の家族の家です」とSNS上にアップしたりしました。さらに自治体に電話して、「もっと親を処罰しろ」「家族の仕事をクビにしろ」と言った人もいました。何もしていない家族まで、SNS上でさらされたり、叩かれたりする記事を読み、どうしてここまでするのだろうかと不思議に思いました。「表現の自由」は、憲法で定められた私たちの権利です。しかし、その行き過ぎた表現は、犯罪者の家族を苦しめています。私はそんな人も、犯罪者の一人ではないかという思いが湧いてきました。さらに、それに同調する多くの人の表現は、被害者や被害者家族への同情ではなく、ただの自己満足か目立ちたいという自己欲求を満たすためなのかなど疑いたくなるものも一部にはありました。それは違う、正義感で行っていると反論する人もいるでしょう。しかし、その正義は誰のための正義なのか、よくわからなくなっている自分がいます。

そこで、自分なりに情報を集めてみました。欧米では家族に連帯責任を問うことはなく、社会的制裁の対象にはならないようです。殺人犯のお母さんがインタビューに答えたからといって、職場に苦情や抗議がくることはなく、まして仕事を辞めざるをえない状況に追い込まれるようなこともありません。加害者家族が自分たちの抱える事情や問題をオープンにできる社会環境にあります。一方、日本には「世間」があり、世間は加害者だけでなく、その家族の責任まで追求しようとします。いわゆる「同調圧力」に対して流され、連帯

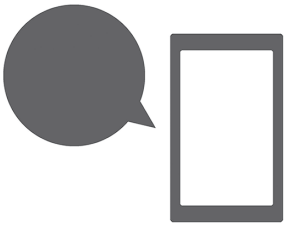
しやすい社会土壌があると考えられます。だから日本では、被害者と加害者、そしてその家族のプライバシーや生活を守ることを最優先に支援を行う必要があるのです。しかし、それがうまくいかないために、多くの矛盾が生み出されています。

私たちが飛び込む社会は、矛盾がまかり通っているという一面を持ち合わせています。しかし、それに目を背けていけば、この先も同じようなことで悲しむ人がいるでしょう。

では、そうならないためには、私は何をしなければならないのか考えてみました。まずは、「デジタル化＝便利」という言葉に流され、「心」がむしばまれないよう人として、本当に大切なことを見極めていくことが求められていると思います。私は、デジタルの進化は諸刃の剣であることを忘れず、自分自身を、そして生きていく上で大切なことを見失わないようコントロールしていく力を身に付けようと思いました。

しかし、私は思うだけでなかなか行動することができません。私は一人で動くことが怖くて、結局周りに合わせてしまいます。これでは私も指摘してきた人と何も変わりません。だから、私自身も変わらなければならないと考えています。変わることをチャンスと捉え、常に成長する自分でいたいと思います。

「Challenge the chance to change yourself」



中学生の部

日本更生保護女性連盟会長賞（優秀賞）

寄り添いの心

佐賀県佐賀大学教育学部附属中学校　一年　武富（たけとみ）　悠真（ゆうま）

「昨日買わせて頂いたお弁当、とっても美味しかったです。景色も綺麗でとてもいいところですね。癒やされました。本当に来て良かった。また絶対来ますね。」

この夏休みに行ったキャンプ場の売店で店の人にそう言った母。僕の母は、こんな風によく人に話しかける。コンビニの人や飲食店の人など。その度に、正直なところ僕は恥ずかしく、どうしてこんなに話しかけるのだろうと思っていた。思い切って母に言ってみた。

「話しかけすぎ。」

「頑張って作った料理をおいしかったですって言われたら嬉しいと思うよ。私は疲れたなって思ってたり、嫌な事があったりした時にそんな事言ってもらえたら頑張れるよ。ありがとうで充分かもしれないんだけどね。つい。」

と、母は笑いながら言った。帰りの車中で思い出してみる。確かに店員さんはとても嬉しそうにしていた。

そうだ。僕も同じような気持ちを感じたことがある。言葉の力というのは大きい。三年前、コロナ禍になり人と接するのが難しい中、僕の元へ手

紙が届いた。差出人は引っ越してしまった友人だ。いつか会おうねと言いながら長い年月が経っていた。会って話したいことがたくさんある。でも会えない。悩みがあったわけではなかったが、少しだけ暗い気持ちでいた時、送られてきた手紙が本当に嬉しかった。何気ない彼の日常と、僕の健康と再会を強く願う思いが書かれていた。僕は、彼が僕の事を考えてくれていた事が嬉しかった。読み終わるととても穏やかな、そして晴れ晴れとした気持ちになった。彼の気持ちが僕に寄り添ってくれているのを感じたからだろう。母のした事は彼と一緒だったのかもしれない。

そう考えているうちにこの前見た映画を思い出した。犯罪や非行を犯した人の更生を支える保護司の物語だ。僕はそれまで保護司というものを知らなかった。作中冒頭で、「保護司は仮釈放で出所した人の保護観察にあたる。犯罪者の更生を助ける。非常勤の国家公務員だが報酬はなし」と説明の字幕を見た時に初めてその存在を知った。

「このままじゃ人間に戻れなくなっちゃう。」

作中で再犯を犯そうとする支援対象者に対して保護司が泣きながら放った言葉だ。このままでは人間に戻れなくなるという言葉に僕は衝撃を受けた。この対象者は幼少期に虐待をうけ、父親が母親を殺害する辛い過去があった。その後、真面目に働いていた時に仕事仲間からいじめを受けた瞬間に、幼少期をフラッシュバックしてしまい事件を起こした。しかし、保護司と関わる事で少しずつ穏やかな表情になっていく。その矢先に母親の死に関わった人を殺害していく弟に再会。弟を大切に思う気持ちから、それを保護司に伝えられず弟の罪に協力してしまう。僕は、心が重くなった。犯罪を犯したり、非行にはしる人にも、それぞれ生きてきた過去があった。辛い時や怒りで心がダメになりそうな時に、誰かが寄り添えば犯罪は起きなかったのかもしれない。僕は、この対象者にも保護司に打ち明けて欲しかった。罪を犯しても、誰かが寄り添う事、誰かに頼り寄り添って

もらう事で再犯は起きないのかもしれない。

映画を見た後、更生を辞典で引いた。似た漢字、同じ読み方で更正がある。「更正」は改めて正す事であるのに対し「更生」は立ち直る事、生き返る事とあった。

保護司はボランティアで行われている。自身の仕事や生活もある中、本気で人を生き返らせたいと思っていなければ難しい事だ。調べると保護司の人数は全国で約四万七千人程しかいなかった。また僕の住む佐賀県は約五百人しかいない。保護司だけでなく、僕達一般の人も、犯罪が起きない、そして更生できる環境を作っていく事が大事だと思う。

コロナ禍で難しい事もあるが、母のように話しかけることも大事なのかもしれない。話しかけるという行動で、自分を気にかけてくれている人がいると分かってもらえる。母の話した店の人や、友人から手紙をもらった時の僕のように。きっと少しでも人に寄り添う事ができるのではないか。

「言葉の力」「気にかける気持ち」「寄り添う心」を多くの人が大事にする事が明るい社会を作る一歩だと思う。

さぁ。僕も今日からやってみよう。照れ臭くてもまずは笑顔で。

「ありがとうございます。」

小学生の部

日本ＢＢＳ連盟会長賞（優秀賞）

地域の自まん再発見

岐阜県高山市立岩滝小学校　六年　川尻（かわじり）　英輔（えいすけ）

ぼくの家は、岩滝にあります。ここは、岩井、滝、生井の三町内でできている地域です。コンビニや病院から離れている地域なので少し不便だなと思うこともあります。でも、乗鞍岳をはじめ雄大な山々を望む景色の美しいところです。カモシカやキツネなどの動物にもよく出会います。春には山菜がたくさんとれ、秋にはたくさんのどんぐりや栗で遊べる。そんな自然豊かなところがぼくは大好きで、自然は岩滝の自慢だなと思っていました。でも、自然以外にも岩滝の自慢があることに気付きました。

岩滝小学校に通って六年目。小学校生活の中で、地域の方々にたくさんお世話になってきました。ぼくが一番好きな行事は、棚田活動です。滝町の棚田は、「天空の棚田」と言われる美しいところです。岩滝小学校は、そこで米作りをしています。全校で田植え、稲刈り、脱穀。いつも、地域の方が指導してくださいます。ぼくたちはみんな講師の方の名前も顔も知っています。講師の方も、ぼくたちを名前で呼んでくれます。地域の講師の方と話ができることも楽しみの一つです。「去年より上手になった。」とほめてもらえると、うれ

しくてやる気が出ます。収穫祭に招待した時、おじいさんの講師の方が、「来年の作業で使ってくれ。」と、全員にあじかを作ってきてくださいました。お世話になっているのはぼくたちなのに。ぼくたちは、大事にされているなと思います。

こんなこともあります。ぼくたちは、毎朝犬といっしょに登校しています。犬の散歩をしながらついてきてくださる方がみえるのです。スクールサポーターの方と犬の名前をもちろんみんな知っていますし、犬のことはリードを引いたりして、みんなかわいがっています。おじさんは、誰かが休むと心配してくださいます。学校に着くと、もう一つの班を迎えに行ってくださいます。安全に登校できるように、ぼくたちのことを大事にして下さっています。

学校で勉強していると、たまに、軽トラックが来て、何かを降ろしていくのが見えます。「たくさんとれたから…。」と言って、ホウレン草やトマトを持って来てくれる地域の方々です。全校みんながもらって帰りますが、家でもらった方の名前を言うときに、ぼくはちゃんと顔も分かっています。よく、社会や総合的な学習で、話をうかがったりするからです。そして、もちろん、聞いた家族も、誰からもらったかちゃんと分かって、出会ったときにお礼を言っています。たくさんの方が、ぼくたちの勉強の講師になって教えに来てくださいます。「いそがしいのに、たのむとみんなこころよく引き受けてくださるよ。」と、先生に聞きました。ぼくたちは、本当に大事にされています。

去年の夏休み、突然ぼくたちのところへ教育長さんがみえました。お父さんが感謝状を受け取り、みんなで記念写真を撮りました。岩滝小学校では、夏休みに公民館や学校のランチルームを使って、「寺子屋」をしています。お家の人が交代で当番をして小学生を預かり、宿題を見届けたり、サイエンスショーや読み聞かせ、防災学習などいろいろな楽しい学習ができる場を作ってくれたりしています。みんなといっしょだと宿題がはかどるし、

みんなでプールに入るのも楽しみです。ぼくは、今まで「寺子屋」があるのは当たり前のことだと思っていました。でも、この感謝状を読んで、これは岩滝だけの特別なことだったんだと知りました。そして、保護者の方々がお互いに協力してぼくたちを見守ってくれていることが分かり、改めて岩滝の地域は人のつながりが強くてあたたかいのだと気付きました。ぼくは、この「あたたかい人のつながり」が、岩滝の自慢なんだと気付きました。

両親のメールに、「不審者情報」がよく入ってきます。「下校途中の児童が声をかけられる」ということが多いと聞いて、こわいなと思うことがあります。また、ニュースでは、いろいろな事件が報道され、いやな世の中だと暗い気持ちになることもあります。どうしたら、社会を明るくすることができるのかな、と考えると、ぼくは、岩滝の地域にヒントがあると考えます。どこの地域も、岩滝のようなあたたかい人のつながりがあれば、悪いことをする人は近づけないのではないでしょうか。ぼくは、下校中何かあったら、岩滝の人ならだれにでも「助けて」と言えます。そんな関係が大事だと思います。ぼくは、これからも、だれにでも進んであいさつをして、人のつながりを大事にしていこうと思います。そして、将来どこに住んでも、岩滝のような温かい人のつながりができるように努力したいです。岩滝のような人のつながりが日本中に広がり、明るい社会になったらいいなと思います。

小学生の部

日本ＢＢＳ連盟会長賞（優秀賞）

寄りそう心

愛知県清須市立星の宮小学校　六年　早川（はやかわ）　佳克（よしかつ）

僕は、学校の道徳の授業で『ロレンゾの友達』という話を聞きました。ロレンゾという男の人が罪を犯したと疑われ、三人の友達がロレンゾに対してどのような行動をとるのか、そんな物語でした。

僕がその友達だったらどうしていたでしょう。とても迷いました。友達を信じたい気持ちや裏切りたくない気持ちもあるけれど、ロレンゾが本当に罪を犯していたら、そしてそれを見逃してしまったら、自分も犯罪者になってしまいます。結局、その授業での僕の答えは“自首をすすめ、納得してもらえないようなら警察に知らせる”というものでした。身近な人が犯罪にまきこまれたらどうするべきか、考えるとこわくなりました。

僕の父は保護司をしています。この「社会を明るくする運動」にも深く関わっています。僕は父に保護司のことをくわしく聞いてみようと思いました。

保護司とは、罪を犯した人が立ち直って社会に復帰できるよう支え、再び同じ過ちをくり返さないようサポートするボランティアだと教わりました。父は保護司になって四年目の四十代、経験も浅く、まだまだ勉強中だと言っていました。それ

でも、保護観察をたん当する人やその家族の話を真けんに聞き、なやみを一人でかかえこまないように気を配っているそうです。

父の話を聞いて、はっとしました。僕は、あのとき、ロレンゾの話を聞こうとしていたでしょうか。人づてに罪を犯したと聞いて、決めつけ、ロレンゾと向き合おうとしていなかったのではないでしょうか。

優しくまっすぐな目で僕を見つめ、父は教えてくれました。大事にしていることは、必ず相手と同じ目線に立って耳をかたむけ、相手のちょっとした変化を見逃さないように注意すること。問題があれば、一緒に解決していこうという姿勢を忘れないこと。保護司とは、相手の心に寄りそう仕事なのだと僕は感じました。

犯罪や非行を防止し、安全で安心な明るい社会を目指して、父は日々はげんでいることを知りました。きっと大変な苦労もあるでしょう。僕は、父のことを格好良いと思うと同時に、自分も何かしてみたいと思いました。例えば、僕の学校生活において、なやみや問題をかかえているかもしれない友達がいたら、何か行動してみようと思ったのです。

僕は学校で、普段からたくさんの友達と話をします。同級生だけでなく、年下の子たちとも話します。その中で、〝いつもとちょっと様子がちがうな〟とか、〝最近元気がないな〟ということに気が付いても、これまでは、ただ見ているだけでした。でも、そっと声をかけて話を聞いてあげることができれば、その友達の心が楽になるかもしれません。

「何かあったの？僕でよければ話を聞くよ。」この一言から始めてみようと思います。

また、遊び半分で友達をからかっている場面を目にすることもあります。からかっている方は遊んでいるつもりでも、からかわれている方はいやな気持ちになっているかもしれません。実際に僕にも同じ経験がありますが、そのときは、いやだ

という気持ちを言い出すことができませんでした。今度、まわりの友達の似たような様子を見かけたら、

「大丈夫？本当はいやなんじゃない？」

そう話しかけて、一緒にどうすれば良いかを考えてあげられたらいいなと思います。

自分の気持ちに寄りそったり、向き合ったりしてくれる、そのような相手が見つかったとき、人の心はやわらかくなり、温かくなります。父も、

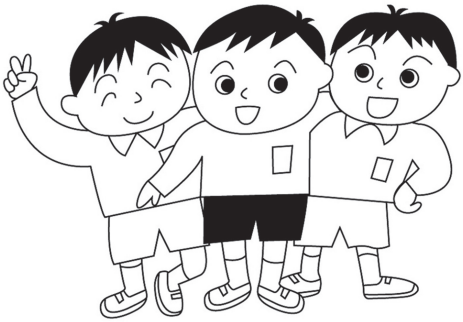
「良くない考えは、心のすき間に入ってくるよ。」

と言っていました。みんなの心が、今よりもっともっとやわらかくなり、温かくなり、すき間なく満たされていけば、社会は明るい方向へ向かっていくのではないでしょうか。

もし僕がロレンゾの友達だったら、まずはこうやって声をかけようと思います。

「君に何かあったのなら話を聞かせて。僕は君のそばにいるよ。」

と。



小学生の部

日本ＢＢＳ連盟会長賞（優秀賞）

つながる明るい未来へ

福岡県北九州市立戸畑中央小学校　六年　榎本（えのもと）　莉子（りこ）

人はなぜ、犯罪や非行を犯してしまうのでしょうか。悲しいニュースを見る度に、そんな事が頭に浮かびます。

今回夏休みの宿題で、「社会を明るくする運動」について作文を書く事になりました。どんな事が、社会を明るくする運動につながるのか見当もつきませんでした。

社会を明るくする運動とは、

「すべての国民が、犯罪や非行の防止と犯罪や非行をした人たちの更生について理解を深め、それぞれの立場で力を合わせ、犯罪や非行のない安全で安心な地域社会を築くための全国的な運動」

との事。私は、どんな理由があろうと、罪を犯してはいけないと思っていたので、自分に何が伝えられるのか悩みました。

初めて、家族で犯罪や非行について話し合いました。その時に、「保護司」という活動をしている方達がいる事を知りました。犯罪や非行を犯した人でも、社会で自立できるように支援する方達です。私には怖くて出きない事だと思いました。どうして、罪を犯した人の支援をするのか理解できませんでした。保護司の方が、どんな思いで活

動されているのか知りたいと思い、取材させて頂きました。

取材に行く前と行った後では、自分の気持ちに変化がありました。話の中で心に残った言葉は、「少年達の多くは、元は純粋でいい子なんだよ。」という言葉でした。実際に少年達と接している保護司さんの言葉には重みがありました。本人だけではどうしようもない理由がある事を教えてくれました。

私には、何でも相談できる両親がいます。学校に行けば、何でも話せて一緒に過ごせる友達がいてくれます。私の周りには、愛情を注ぎ、寄りそってくれる人が沢山います。支えてくれる人がいると思うだけで、強い気持ちでいられるのです。

もしかしたら、犯罪や非行を犯してしまった人達の周りには、そういう人がいなかったのかもしれません。罪は決して許される事ではありません。しかし、本人だけが本当に悪い人だったのでしょうか。

私は、保護司の方から話を聞く事で、自分の知らなかった事を知る事が出来ました。私自身の考え方も変わりました。罪を犯す人が悪い人ではないと思います。周りの環境によって、犯罪や非行につながってしまう事もあるからです。「孤独」という寂しさが、人の心を奪い、犯罪や非行という道へ導いてしまうのではないでしょうか。

保護司の方達の温かい思いが、一人でも多くの人に届き、立ち直るきっかけになって欲しいと思います。罪を償うと同時に、心のケアが必要です。こういう活動の一つ一つが、社会を明るくする事につながっています。

更生しようとしている人に対し、私達には何が出来るでしょうか。

一つは、情報に流されず、偏見を持たない事。今はテレビだけに限らず、ＳＮＳによって様々な情報が入ってきます。うそか本当かも分からないような内容が拡散され、すぐには消えません。それがきっかけとなり、再犯へとつながってしまう

かもしれません。私達は、「現在のその人」を見なければいけません。過去よりも現在、現在よりも未来が大切だからです。

そして何よりも大切な事は、笑顔で温かい気持ちで迎え入れる事です。いざ更生し、社会復帰をする事は、とても勇気のいる事だと思います。立ち直ろうとしている人に対し、一人でも多くの人が理解をしてあげる事で、自信を持って歩んでいく事ができます。互いに歩み寄る事で、また一歩、明るい社会へとつながっていきます。

今の私に出来る事はなんだろうか。クラスで寂しそうにしている人がいたら、勇気を出して話しかけてみよう。学校が始まったら、自分が知った事を友達に話してみよう。小さな事かもしれないけれど、社会の一員として、「社会を明るくする運動」に携わっていきたいです。

一人一人の思いやりで、小さな輪も大きな輪となり、みんなが寄りそい、つながっていけるような社会になることを願っています。

中学生の部

日本ＢＢＳ連盟会長賞（優秀賞）

一言の重み

岩手県一関市立磐井中学校　三年　千葉（ちば）　日菜（ひな）

もしも、自分にとってとても大切な人から「死にたい」「消えたい」と胸の内を明けられたら。その時、相手にどんな言葉を返せるだろう。その返答次第では、明日の犯罪者を生み出すかもしれないような重みがあることに、気づいているだろうか。

ニュースを見ていると、凶悪な事件の犯人の取り調べでの様子が報道されることがある。その中で、加害者が「ずっと辛かったが一人では死ねなかった。誰かを巻き込もうと思って事件を起こした」などと口にしていた、というのを耳にしたことがある人も少なくないだろう。また、被害者の方も「加害者とはＳＮＳで知り合って悩みを相談するようになり、最終的に事件に巻き込まれてしまった」という話もよく聞く。

これを見て、関係ない人を巻き込んだ加害者に改めて嫌悪感を抱く人もいるだろう。そして、「だからＳＮＳの使い方に気をつけろと言っているのに、被害者はあまりにも注意が足りない」という考えも浮かぶかもしれない。「こんなことになる前に親しい人に相談すればよかったのに、どうしてそうしなかったのだろう」と感じる人もいると

思う。

だが、ここで視点を変えてみよう。「相談しなかった」のではなく、「相談できなかった」のだとしたら。加害者であれ、被害者であれ、どれほど苦しんでいたことになるのだろうか。誰にも言い出せない気持ちに気づいてほしくて、事件を起こしたり、危険と分かっていて知らない人との交流を続けているのだとしたら、あまりにも切ないことではないだろうか。では、そういう行動に走ってしまう原因は何か。それはきっと、その人を取り巻く環境なのだと、私は考えている。

私がこの考えを持ったのには、きっかけがある。ある日、ごく身近にいる人に「人とうまく話せない」と相談したときのことだ。そのときの私は、話の続きを聞いてほしかったのかもしれないし、共感してほしかったのかもしれない。けれども、その相手は「その壁を乗り越えられるかが勝負だよね」とだけ言って、自分の作業に戻っていった。

文字にして読むと、ひどい言葉には見えないかもしれない。だが、当時の私の心には、この言葉が鋭く突き刺さった。「私だって努力はした。頑張ってもうまくいかないから相談したのに、どうしてそんな根性論を語るんだ」と。結果的に「根性論」を突き通して解決するケースもあるだろう。だけど、その時の私は、それで自分の抱えた悩みが解決するとは思えなかった。

その日から、私は身内に悩みを相談しなくなった。これ以上、自分の周りにいる人のことを嫌いたくない、相談して余計に傷つくのはもう嫌だ、と思ったからだ。

事件を起こしたり、巻き込まれたりする人の中には、このときの私のように、相談したことで余計に傷ついたり、相手にすらしてもらえなかったりした経験が重なって、その結果として他人を巻き込んだ犯罪につながってしまった人もいると思うのだ。

もちろん、相談された側も、相手を励ますつもりで考えて、言葉を発しているのかもしれない。だか

らこそ厄介なのだと、私は思う。悪意のない言葉が、苦しんでいる人をさらに追い込んでいくのだから。

気づいてほしい、共感されたいという欲求を犯罪行為につなげないために、私たちにできることは何か。それは、相手の特性をよく理解して、寄り添うことだけだと思う。

人はそれぞれ、強気だったり、口に出すのが苦手だったり、傷つきやすかったりといった個性や特徴を持っている。それを踏まえて、その人の心に一番響く言葉を届けられるのは、いつも近くで関わっている家族や、友人なのではないだろうか。

関わりを持っている人たちが、突き放さずに話を聞いてあげること。その人がどんな感じ方をするのか考えながら、言葉をかけてあげること。それが、身近な人を犯罪に走らせないために、私たちにできることだ。

あなたの大切な人を一人、思い浮かべてほしい。その人に本心を打ち明けられたら、悩みを相談されたら、あなたは何と返すだろう。今、あなたが相手を思って考え出したその言葉は、明日の犯罪を減らすための鍵となるかもしれない。

中学生の部

日本ＢＢＳ連盟会長賞（優秀賞）

心の孤立を防ごう

愛知県名古屋市立一柳中学校　三年　尾崎（おざき）　孝太朗（こうたろう）

五月、僕の中学校に愛知県警の警察官が来た。「薬物乱用防止講話」と題して、薬物の恐ろしさ、薬物に手を出すのは若者が多いこと、更生は難しく、再犯率が高いことなど、詳しい話を聞く機会があった。

ちょうどその頃、自宅で購読している新聞でも罪を犯した人々の特集記事が一年以上にわたって連載されており、興味深く読んでいるタイミングだった。僕は、警察官の話を聞きながら新聞記事の内容を思い出し、更生が必要な人と社会とのつながりについて、更に深く知りたいと思った。そこで、夏休みに入ってすぐ、名古屋地方裁判所へ向かった。

「主文、被告人を懲役八年の刑に処する。未決拘留二〇〇日を算入する。」これは、僕が人生で初めて傍聴した刑事裁判の判決だ。その内容には、強盗や詐欺など恐ろしい言葉が並んでいたが、入廷した被告人を見て驚いた。日頃、僕が街ですれ違う人々と何も変わらない若い男性だったからである。しかし、犯した罪は重く、三名の裁判官と六名の裁判員、検事、弁護士、書記官、そして大勢の傍聴人で埋まった厳粛な法廷で判決は響い

た。僕はとても残酷に感じ、「八年」と告げられた被告人の心情を考えた。八年後、目まぐるしく変わる世の中について行けるのか。仕事は見つかるのか。頼れる人はいるのだろうか。

僕がそんなことを考えていると、裁判長が被告人から預かった文面を読み上げた。それは「悪い関係を断ち、社会復起のため勉強も頑張り、定職につき、真面目に生きる」という内容で、被告人の強い意志や決断を感じた。

閉廷前、裁判長は、「まだ若いからやり直せます。しっかり反省し、家族のためにも頑張って、社会復起してください」と温かく優しい言葉をかけた。被告人は、しっかり二度うなずいていた。重い判決のわりには、意外なほど温かく優しい口調だったので、少しほっとした。被告人も僕と同じように感じただろうか。

彼らの立ち直りを支える活動をしているのが保護司である。裁判の翌週、知人を通じて保護司に話を聞くことができた。その方は、僕の訪問を二つ返事で引き受けて下さった。中学生が活動に興味をもっているということを、とても喜んでいるように感じた。

保護司の方は、活動内容や経験談を、全く知識のない僕に分かりやすく話してくださった。話を聞き、僕は考えた。罪を犯した人々に共通していることは、相談できる仲間がいないことかもしれない。だから、心が孤立しているのだと思う。相談できる仲間がいれば、楽しく過ごせる仲間がいれば、きっと道を間違えなかったはずだ。気に掛け、寄り添う人がいれば、罪を犯した人も立ち直ることができるかもしれない。

また、犯罪を未然に防ぐための活動も重要で、これは、僕の学校に来た警察官の講話のことを指している。学校などで、こういった時間を設けることの重要性を感じた。

実際に、僕も新聞記事を読んだこと、学校で話を聞いたことがきっかけで裁判所へ行き、更に保護司の活動について知ることができた。

この経験をどのように活かせばよいのか。

まだ中学生の僕に、保護司のような活動はできない。しかし、家族や友人との日常会話の中で、社会の問題について話し合うことはできる。皆が関心を持つことが大切なのだ。

僕の家族は、みんなよくしゃべる。僕と弟は競うように一日の出来事を家族に話す。父母も、仕事やＰＴＡなどの出来事を話すし、学生の頃の思い出話を聞くのはおもしろい。お薦めの本や新聞記事も教えてくれる。

社会に関心をもつということは、こういった何気ない日常も当てはまるのかもしれない。そして、何でも話せる家族の存在はとても大きいのだ。

僕は父の仕事の関係で、何度か転校を経験したが、人間関係に苦労はなかった。社交的な性格なので、すぐに友達もできた。しかし、そうでない人もいる。学校、仕事が思うようにいかず、生きづらさを感じている人が多いらしい。今後、もしそういった人が周りにいたら、積極的に声を掛けて明るい雰囲気を広げていこうと思う。それが孤を描くようにどんどん広がれば、心の孤立を感じる人も減り、非行や犯罪を防ぐことになるだろう。

僕には、今より明るい社会が見えてきた。

中学生の部

日本ＢＢＳ連盟会長賞（優秀賞）

社会を明るくする食堂

山口県岩国市立岩国中学校　一年　墨川（すみかわ）　翔也（しょうや）

部活が終わって、六時半頃くたくたになって帰ると、家には明かりがついていて、夜ご飯のいい匂いがします。

「お帰り。」

と母

「ただいま。」

と僕が返すと

「学校はどうだった？水筒すぐ出しんさいよ。」

僕はうっとうしいな、と思いながら風呂場で部活でかいた汗を流します。

「今日、ご飯なに？」

と聞くと、

「今日のご飯は〇〇だよ。」

と返事が返ってきます。僕にとっては、あたりまえの日常です。

でも、僕の周りには、誰もいない家に帰り一人で冷めたい弁当をレンジで温めて、一人で食べて、自分で水筒を洗ったりするのが、小学校の頃からあたりまえな友達もいます。僕は、一人で食べたことはありませんが、想像しただけで、さみしい気持になります。同じ中学生なのに、夜ご飯を自分で作って自分一人で食べる人もいます。し

かも、中学生の僕でも想像しただけでさみしいと感じるのに、小学生だったらなおのことさみしいし不安だろうなと思います。そんなことを考えていたとき、子ども食堂という活動を知りました。

子ども食堂とは、地域住民や自治体が主体となって、無料または低価格帯で子どもたちに食事を提供するコミュニティの場です。また、単に子どもたちの食事提供の場としてだけでなく、帰りの遅い会社員、家事をする時間のない家族などが集まって食事をとることも可能と知りました。

今、現在全国に六千箇所以上もの子ども食堂があるそうです。コロナ禍でも子ども食堂の数は増え続けているそうです。岩国にも六軒の子ども食堂があるそうです。ぼくは、岩国にも子ども食堂があるのを、今回始めて知ったのですが、もっと沢山の人にこの活動を広めていけたら、一人さみしく孤独に夜ご飯を食べる子どもが、一人でも減って楽しく笑顔で、食事をとることができるのになぁと感じました。

孤独でさみしい子ども時代が長いと、大人の気を引こうとして、犯罪や非行にはしる子もいると思います。平成三十年度の調べによると、小学校・中学校・高等学校における、暴力行為の発生件数は、七万三千件。特に小学校においては、在籍児童数が減少しているのに増加が続いているそうです。

小学生が暴力行為をしてしまう理由に、「感情がうまく制御できない。」などがあるそうです。子ども食堂のような地域のコミュニティの場の利用を促進していくことで、自分より小さな子や知らない大人と関わることができると思います。そして、この人との関わりが、これらの児童・生徒の非行の問題を解決するためのヒントがたくさん見出せる気がします。

全世帯の六割が核家族である今、孤立・孤食は、子どもを含めたあらゆる世代に広がっているそうです。

家庭でも学校でもない、地域に住む人々が集まれる、子ども食堂のような第三の居場所があったら、孤立・孤食をする人が一人でも減らすことができ明るく、温かい社会を作っていくことができるのではないでしょうか。

子どもたちが自分の足で一人で行くことができて、安心して過ごせる場所であり、子どもたちは食事の提供や学習支援を受けたりできる場所が近くにあれば、僕も行ってみたいです。

教育とは、学校だけで身につけるのではなくて、そういった場で地域の大人たちが地域の子どもに教えられることが、たくさんあると思います。ぼくみたいな中学生でも、小学生に教えてあげれることもあるし、さびしい気持ちを聞いてあげることもできると思います。

子ども食堂なんて、自分には関係ないではなく、少しでも関心を持って知ることからみんなに始めてもらいたいなと思いました。

長い人生の初めの子ども時代に、子ども食堂の様な沢山の温もりの中で、温かいご飯をみんなで食べたり、地域の大人と話したり、話を聞いてもらったり、やさしさをもらう体験は心の栄養となって、大人になっていくうえでの、心の支えに必ずなると思いました。そして、こういった場所が増えると必ず社会は明るくなると思いました。

小学生の部

日本更生保護協会理事長賞（優秀賞）

まずはあなたの一歩から

埼玉県朝霞市内公立小学校　六年　（氏名非公表）

犯罪を無くすために、犯罪をしてしまった人がもう二度と罪を繰り返さないために、自分にできることはなんだろう。

どんな罪を犯していても、命を奪うということは、あってはならないと思う。毎日のようにテレビに映るのは、フードを被る罪を犯した人だった。罪を犯した人達を更生するとなるとやはりそう簡単にもいかないだろう。罪を犯した人はどうせまた何の気なしに同じことを繰り返す、もしもどうにかして非行を繰り返させないように親身に話を聞こうとするならば、それに費やす時間と労力がどうしても必要になってくる、それなら、もっと被害者のケアを優先してほしいな、と思っていた。これは最初、私の正直な罪を犯した人に対する気持ちだった。でも今は、そんな風に考えることはなくなっている。私は、周りとの差、社会への不満や勘違いなどが、犯罪へつながる道だと思う。

最近私は、死刑になった受刑者のニュースを見た。彼は大きな罪を何度も繰り返した上に、逃亡し、食料の窃盗をした。逃亡中気付かず彼の周りに居た人は「優しい人だったのに、信じられな

い。」と驚いていたそうだ。結果彼は捕まり、死刑が執行されたことが発表された。被害者は果たして加害者が死刑にされることを求めているのだろうか。では、もしあなたの大切な人が加害者の手によって傷ついたのだとしたら、すでに帰らぬ人となっていたのなら。被害者の身内や大切な人が何より望むのは、加害者の命ではないと私は思う。もう戻ることのない被害者の命だが、だからこそ、加害者にその命の重さを理解させ、背負って歩かせることが必要なのではないか。もしも加害者が死刑になったとすれば、加害者と被害者の身内もまた、辛い思いをするだろう。どんなことをしていても、一つの尊い命であることに変わりはないのだ。故意に罪を犯した者もそうでない者も、周りの環境に影響されて望まない結果になってしまった人も少なくないのだと思う。

また、そもそもの罪を無くすことも大切だと思う。ある時、クラスメイトの消しゴムが隠された。みんなで教室や廊下を探し回って見つかったのはカーテンの裏だった。隠された子はただ泣いていた。時がすぎて、また別の日、違うクラスメイトの消シゴムが無くなった。消しゴムが見つかったのは遠く離れたクラス前の廊下だった。隠されたクラスメイトは色を失なった、悲しそうな目をしていた。犯人探しが始まった。

「お前だろ。」

「いやお前に決まってんじゃねえか。」

「いやあいつだろう…。」

教室がざわめいた。すると先生は大きな声で言った。

「先生はどんな理由であったとしても消しゴムを隠した人を許しません。隠された人を傷つけたからです。先生は何の理由もなく誰かを疑う人を許しません。無責任に疑われた人を傷つけたからです。だから、先生はなんの理由もなく誰かを疑う人と、消しゴムを隠した人を同じように怒ります。」

シンとした空気が漂う教室の隅に、一つ泣き声

が聞こえた。涙をぬぐい続けて真っ赤に腫れた目を覆いながらその子は

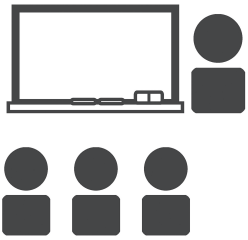
「ごめんなさい。」

そう何度もくり返していた。先生は

「よく自分から言えたね。」

と言った。

それからどんなに時間が経とうとも、誰もその子を責めることはなかった。いじめは、誰かを傷つけることを望んでやっている。誰かのことを一方的に、無責任に傷つける。でも、いじめをした人も、罪を犯した人も、更生することができるのだ。罪の重さは違っても、傷つく人がいるのに変わりはない。だからこそ、止めなければならない。たった一言、小さな勇気だけで、将来起こる犯罪を一つ、また一つ無くしていける。「周りとの差」と私が捉えていたのは、一人ひとりの個性なんだと知った。「勘違い」と捉えていたのは、それぞれの考え方があってこそなんだと知った。重い罪も軽い罪も、変わりない犯罪だ。だが、その罪をしっかりと償った上で更生し、また一から新しく社会の一員となって働いて生きることは、良いことだと思う。命をもって償うことは、遺族や身内には納得かもしれない。しかし、加害者の家族にも同じ思いをしてほしくないと考える人も、私と同じようにいるかもしれない。犯罪に対する冷たい目は閉じて、澄み切った心を誰もが持てた時、一人ひとりが犯罪とはどんなものか、向きあって理解することができると思う。他人事ではない、自分の考え方ひとつ変えることから始めていけば、あなたもきっと誰かの救いになれるはずだ。



小学生の部

日本更生保護協会理事長賞（優秀賞）

何度言ったら分かるの

富山県富山市立音川小学校　六年　田中（たなか）　愛（あい）

「あれ？今日の夕飯何だっけ？」
祖母が私に聞いてきた。
「だから、カレーって、言ってたじゃん。これで、聞くの三回目。」
私はスマホを見ながら、強い口調で言い返した。
私は家に両親がいないときは、近くにある祖母の家に行くことになっている。その祖母は最近、物忘れが多くなった。
その日、私は祖母と一緒に夕飯の買い出しに行った。
「今日の夕飯何だっけ？」
祖母がまた、私に聞いてきた。
「もう何回言わせるの。だから、カレー。もう、覚えて。」
私はさっきよりも強い口調で言い返した。
祖母は家に帰ってカレーを作り、それをみんなで一緒に食べた。
母が迎えに来たので、私は車の中で祖母のことを話した。
「なんか最近ばあちゃんの物忘れがひどすぎて、腹が立ってきた。」
「私も、そう思うちゃ。」

母は言った。そして二人で、家に帰った。
　ある日、久しぶりに家族全員でお出かけをした。そのついでに祖母の家に遊びに行った。
祖母は父に、
「お茶いるかい。」
と聞いて、父は、
「あ、大丈夫です。」
と、顔を見て優しい声で言った。しばらくして祖母はまた父に、
「お茶いるかい。」
と聞いた。私は「またいつものように同じことを話してるじゃん」と思った。すると父は私が思ってもいなかった言葉を発した。
「さっきから気遣いありがとうございます。お茶は大丈夫です。」
と、また顔を見て優しい声で言った。私だったら「さっき、いらんって言ったじゃん」と顔も見ずに強い口調で言うはずだ。父が気遣いをしてくれた気持ちに対して、お礼を言っていることに驚いた。

　私はそのとき、「そういえば、ばあちゃんは、私がどんなに強い口調で言っても、優しい声で聞いてきたり、返事をしたりしていたなぁ」と思い返した。父が祖母にお礼を言っていると、祖母は笑顔になっていた。私は、今まで強い口調で言っていたことを、祖母はどう感じていたのか気になってきた。机の上には、記憶力を維持するガムが置いてあった。私は、はっとした。祖母は物忘れが前より多くなっていることを自覚していたのだ。私は初めてそのことに気が付いた。
　家族で家に帰ると、祖母から電話がかかってきた。
「愛ちゃん、ばあちゃん物忘れ多くて迷惑をかけてごめんね。ばあちゃんも、自分なりにこれから気を付けるね。」
私は祖母が言ったことに、返事をすることができなかった。祖母は物忘れが多くて、みんなに迷惑をかけているとずっと思っていて、少しでも物忘れを少なくしようと、自分なりに頑張っていたのだ。

困っている家族に強く当たったり、自分の気持ちを表に出して返事をしたりすることは相手にとってすごく傷付くことだと思った。相手の顔を見て、優しい声で会話することが大切なのだと、父を見て気付いた。

最近のニュースでは、お互いの主張が食い違って事件になっていることが多いように感じる。ちょっとしたことでも感情を抑えきれずに、暴力に発展することもある。

そんなニュースを見ると、「私は相手の立場を考えて、みんなが気持ちよく生活できる社会や環境をつくっていけたらいいのに」と思う。自分の思いばかりを主張していては、お互いの関係が悪化し、トラブルにつながってしまう。自分と異なる意見や立場であっても、互いに思いやり、尊重する気持ちがないと誰もが気持ちよく生活しているとは言えない。社会には様々な理由で苦しんでいる人、困っている人がたくさんいるのは事実で、簡単に変わるものではない。しかし、私たちは誰に対してもその人の立場や気持ちを考えて優しい声で顔を見て会話することが大切だと思う。その人が話す声のボリューム、その人の表情、その人の行動からも、何かに気付くことがあるかもしれない。

みんなが気持ちよく生活できる社会のために、これから私は、まず、相手の立場や気持ちを考え、言葉に気を付けて、いろいろな人と接していこうと決めた。今日も祖母の家へ行って、いろいろな話をしたいと思う。

小学生の部

日本更生保護協会理事長賞（優秀賞）

人を思う気持ちが犯罪を防ぐ

香川県観音寺市立一ノ谷小学校　六年　石川（いしかわ）　美菜子（みなこ）

今年はとても悲しいニュースで始まりました。ウクライナで戦争が始まり、罪のないたくさんの人の命がうばわれています。犯罪や事件のニュースも、毎日のようにテレビから流れてきます。せっとうやさぎ、エスエヌエスでのひぼう中傷などで心を傷つけてしまうだけではなく、人をなぐったり、刃物でけがをさせたり、命までうばってしまったりというニュースもたくさん聞きます。このようにとても簡単に人を傷つけてしまっていることに、私自身、悲しみと怒り、そして疑問を抱きました。

生まれてきた時から、人を傷つけようと思う人はいないはずです。しかし、どうしてこのような戦争や事件等が起こるのでしょうか。生まれた時の気持ちを持ち続けていれば、人が人を傷つけることはないはずです。

私は、「人を思う気持ち」がもてていないのだと考えました。「人を思う気持ち」とは自分に置きかえて考える力、そして、正しいことは何かと考え、それを実行に移す力だと考えます。その力は、「自分は大切にされている」と感じる経験が積まれることで、身についていくものだと、私は

思います。

私自身を振り返ると、これまで生きてきた中で、自分のことを大切にされていると感じる経験が、多々あることに気付きました。

私は、けがや病気で病院に行った時、待合室で、母が持ってきた私の母子手帳をよく見ます。そこには、私が母のお腹にいた時から今までの成長の記録が詳しく書かれています。五ヶ月の時、お腹の中で、私が動いているのを感じた母のうれしい気持ちや、生まれてから三ヶ月目に高熱を出し、みんなが心配したこと、百七十日目に左下の前歯が生えたことや、初めてしゃべった言葉が、お茶を意味する「ちゃちゃ」だったことなど、他にもとてもたくさんのことが母の文字で書かれています。それを見ると、自分の命は、母や家族にとって、とても大切な物だということがよく分かります。そして、その母子手帳を今でも大切に保管し、記録を続けてくれていることをうれしく思い、家族のことを大切に思う気持ちが強くなります。

私の担任の先生は、時々先生の子どもの話をしてくれます。子どもの写真をみんなに見せてくれたり、参観日に行った時などの話をする先生の表情は本当にうれしそうで、子どもを大切に思っていることが伝わってきて、聞いている私までうれしくなります。

自分のことを大切に思ってくれている人は、家族だけではありません。今年の夏休みに、私の母は、役員の仕事で青パトに乗り、私たちの住んでいる地区をじゅん回補導しました。運転してくださったリーダーの方が、たくさんのことに気を配ってじゅん回していることに、驚いたそうです。子どもたちが集まっていそうな所や、うす暗い犯罪の起きそうな所を必ず通って、危ないことがおきていないか確認すること、冬は街灯の切れている所がないか点検もするそうです。母がじゅん回した日は、子どもの姿を見かけず、何もなく無事終わったけれど、それが一番良いことだと話してくれたそうです。自分の家族のことのように私た

ちや地域を大切に思い、見回ってくださることを母から聞いて初めて知り、私は感謝の気持ちでいっぱいになりました。

また、地域の方は、日頃からみんなよく声をかけてくださいます。学校の行き帰りはもちろん、散歩をしていても、すれちがう人みんながあいさつをしてくれます。「大きなったなあ。」「元気ないやん。どうしたん。」と、心配してくれることもあります。あいさつや声かけも人を思う気持ちの表れだと思います。

家族や先生、地域の人との関わりの中で、「自分は大切にされている」と感じたこのような経験を、みんなが積むことで、「人を思う気持ち」が強くなり、犯罪を防ぐことにつながるのではないでしょうか。

私は、この作文を書きながら、私以外の人も、みんな必ずだれかに大切に思われていて、絶対に人を傷つけたり、誰かに傷つけられたりするようなことがあってはならないと、改めて強く思いました。私はまだ小学生です。小学生だけれど、犯罪の起こらない社会にするためにできることがあると思います。学校やクラスの中で、自分も友だちも同じように大切にすることです。悪口を言ったり、傷つけたりしてしまいそうになった時は、自分が多くの人に大切にされてきた経験を思い出して、一度立ち止まって自分に置きかえて考えようと思います。私が周りの人を大切にすれば、周りの人も私のように自分に置きかえて考えることができ、人を傷つけなくなるはずです。まずは学校の中で、そして、地域の一員として、私がこれまでに経験した大切にされているという気持ちをどんどん広げていきたいです。

中学生の部

日本更生保護協会理事長賞（優秀賞）

更生保護を知って

群馬県草津町立草津中学校　二年　米（よね）　浩孝（ひろたか）

「じゃあ、面接に行ってくる。」そう言って出かける祖父の姿を何度となく見送った。僕は、祖父が何のために出かけるのかわからず、家族に聞くと「保護司の仕事だよ。」と言われた。「保護司って何だ。どういうことをしているんだろう。」僕は疑問に思い、インターネットで調べると、「更生保護」という言葉が出てきた。更生保護とは、犯罪をした人や非行歴のある少年を社会の中で適切に処遇し、再犯を防ぎ、自立し改善、更生することを助けることだという。

そこで思い切って祖父に尋ねてみた。祖父は、「保護司の仕事は、犯罪を犯して刑務所に入っていた人や、刑務所には入っていないが、保護観察が必要な人、非行のある少年と面接して、その人達の悩みや不都合なことを聞いて、改善や更生のための手助けをするんだよ。」と教えてくれた。

祖父の話を聞いて僕は、「なぜ、悪いことをして刑務所に入ってきた人はまた同じことを繰り返してしまうのだろう。刑務所から出てきた人達にどんな生活が待っているのだろう。」と思い、祖父に聞くと、祖父は「犯罪を犯してしまった人がまた罪を犯すのには理由があるんだ。まず、刑務

所から出るにしろ、警察から出るにしろ、捕まったことによって、職を失ってしまう。お金も無く、住むところすら無い人もいる。そのために住むところや職が見つかるまでの間、更生保護施設に入ることもできる。苦労して職場を見つけても、理不尽な差別にあったり、厳しい世の中に挫折してしまい、誘惑に負けてまた犯罪を犯すということも多い。だから、立ち直りの手助けをするために保護司がいるんだよ。」と説明してくれた。僕が思っているよりずっと不自由な生活なのだとわかった。祖父の行っている活動は、犯罪を犯してしまった人がまた間違った道に進まないように手助けし、そういった人々の能力が社会で活せるようにして、本人はもちろん、その周囲の人や地域を明るくしている、野球のキャッチャーのような役割なんだと思い、なんだか祖父のことを誇らしく感じた。

僕は、他の人はどう感じているのか聞きたくなり、家族と話してみたくなった。家族で一番僕の話を聞いてくれるのは、父だ。父に話してみよう。父に、「犯罪を犯してしまった人とどう接したらいいんだろう。」と聞いた。父は「人は間違いだらけなんだよ。間違いを起こすから人間なんだ。産まれた時から犯罪を犯したくて産まれてきた人はいない。お父さんだって、おまえだって、誰にしたって絶対なんてことは無い。お父さんも、自分がそうなってたんじゃないかと思う時がある。だから、犯罪を犯したというだけで差別してはいけない。その人の中身を見ることが大切で、他の人と平等に接するべきだ。」と言った。なるほど。確かに産まれた時から悪なんて存在しない。それぞれ道を間違える理由があったんだろう。そう思った。

父は、僕の父親であり、剣道の師匠でもあり、喧嘩相手でもあり、良き相談相手だ。大抵のことは、父に何でも相談する。父に話せないことは、祖母に聞いてもらう。今まで感じたこともなかったけれど、僕には頼れる人がたくさんいる。とて

も幸せなんだと思う。

僕は、小学校の時から剣道を習っているが、悩んだことがある。色々な先生に「こうした方がいい。」と違う指導をされて、「何をすればいいのかわからない。」という状態になってしまった。何をしても中途半端で、決して手を抜いているわけではないのに、注意される。負の連鎖だ。そんな時、父が「どうした。」と声をかけてくれた。僕は父に叱られるのかと思い、恐る恐る理由を話した。すると、父は「自分ができると思うことを一つやりなさい。できたら、また一つやりなさい。」と言った。僕は頭の中のモヤモヤがスーっと晴れた気がした。それからは一心不乱に剣道に打ち込むことができている。そんな簡単なことでも自分で気づけない時は地獄だ。でも、何気ない一言でも人の気持ちは変わり、明日が明るくなる気がした。きっと、犯罪を犯してしまった人の周りにはそんな人がいなかったのだろう。

僕にできること。それは、祖父や父を見習って、身近な人の小さな異変に気づける大人になることだ。僕はもちろん、自分の家庭や友人から道を踏み外す人が出ないよう、「気づく」こと。おかしいと思ったら、勇気を出して「声をかける」こと。声をかけられなかったら、信頼できる親や大人に「聞いてみる」こと。この「3K」を実行できれば、悩みを持っている人や不満がある人の心を少しでも軽くしてあげられると思う。僕自身がまだまだ子供で、できることも少ないかもしれない。それでも少しずつ明るい社会になるよう希望への一歩を踏み出して行きたい。

中学生の部

日本更生保護協会理事長賞（優秀賞）

犯罪が必要のない社会を

奈良県生駒市立生駒南中学校　三年　三橋（みはし）　野乃子（ののこ）

私は犯罪や非行をしようと思ったことはありません。それはありがたいことに、ものを盗まなくても食べるものがある、不自由なく生きていくことができる、それはすなわち犯罪が必要なくても生きていくことができる、ということです。では犯罪を起こしてしまった人はどうだったのでしょうか。

私は以前にある事件を知って、深く考えさせられました。

それは「京都伏見介護殺人事件」という、二〇〇六年二月一日に京都市伏見区の河川敷で起こった、五十四歳の男性が自分の母親を殺害したという事件です。一見このニュースを見ただけだと、男性が悪いだけなんじゃないのか？と思うかもしれません。けれどこの男性は父親の死後、認知症を発症した母を休職してまでたった一人で介護していたのです。だけどとうとうお金がつきて生活保護を申請しましたが、休職を理由に認められなかったそうです。男性は家賃などが払えなくなり、二人での心中を考えるようになります。

そして二〇〇六年の真冬の日に、

「もう生きられへんのやで。これで終わりや」

「そうか、あかんのか」

という会話をした後に心中を図りましたが、男性だけが命を取り留めたのです。

この事件の記事を読んだときから、「母の命を奪ったが、もう一度母の子に生まれたい」という裁判での男性の言葉が頭から離れなくなっていました。この言葉には、裁判官が言葉をつまらせ、法廷は静まり返ったそうです。本当にお母さんのことが好きだったんだな、とひしひし伝わってきました。そんな母親を自分の手で殺すなんて、なんと辛いことだったのでしょう。とても心が痛みました。

どうしてこの男性はここまで追いこまれることになってしまったのだろう、と考えさせられました。お金がなければ死ぬしか選択肢がないのかな…と考えてみたりもしました。けれどそれはあまりにも残酷すぎると思います。

お金がないと、人のものを盗まなければ、お店のものを盗まなければ生きていけない、それか死ぬしかない。なんてそんなことになっているのが問題だと思いました。裁判官も「裁かれているのは被告だけではない。介護制度や生活保護のあり方も問われている。」と言葉にしています。じゃあ何か改善策があるのか、と言われるとそう簡単にはでてこないのが難しいところなのです。けれどどうしようもない、なんてままには絶対にしたくありません。

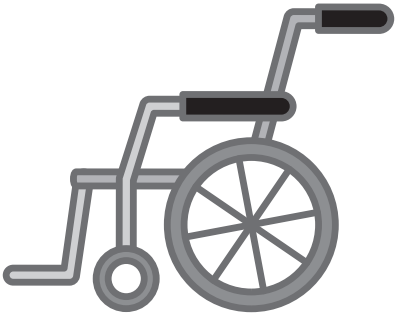
犯罪を起こした人は子どもの頃、家庭が経済的貧困であったり家庭内暴力を受けていたケースが多いのだときいたことがあります。そういった家庭で育った場合は、恵まれた家庭で育ててもらった私が持っている「自分が罪を犯して家族や周りの人を悲しませたくない。」といった考えがないのかと思いました。家族なんてどうでもいい、という考えを持っているのかと思うとなんとも言いようのない悲しい気持ちでいっぱいになり、とてもそれが原因で犯罪を起こした人を責めることができないです。

もちろん犯罪はしてはいけないことだけれど、犯

罪が起こった経緯や犯人の状況をよく考えてみようと思いました。もし自分がこんな状況に置かれたらどのような行動をとっていたのだろう、このような犯罪が起こらないようにするにはどうすれば良かったのだろうと考えてみようと思いました。

私がもし、生きていくのに困難な状況に陥いったらまずは周りの人に相談してみたり、周りの人がそうなってしまったときには相談にのって助けられたらうれしいです。

犯罪が起こる前に、まずは犯罪の起こらない「犯罪が必要のない社会」をつくっていくにはどうしたらいいのかを、一人ひとりがしっかりと考えていくことが大切だと思いました。これは私も考えていきたいし、みなさんにも考えてもらって犯罪と向きあうことをしてほしいです。そしてそれが「犯罪が必要のない社会」へと繋がっていくことを願っています。



中学生の部

日本更生保護協会理事長賞（優秀賞）

関わりから生まれるもの

沖縄県与那原町立与那原中学校　二年　松田（まつだ）　光央（みお）

私は社会を明るくする運動というものがどういう運動なのか、私たちに出来ることはあるのか、よく考えたことがありませんでした。

そこで、明るい社会とはどういうものか、自分なりに考えてみることにしました。それは非行や犯罪などを未然に食い止めたり、犯罪歴のある人を犯罪者として差別するのではなく、その後の立ち直りに協力したり、子どもや老人、働く人々すべてが幸福感を持って生活することではないかなと考えました。

小学生の頃、私には仲良しで、よく一緒に遊ぶ友達がいました。その友達は優しくて真面目でした。その子とは、学年が上がってクラスが離れてしまった頃から、あまり遊ばなくなってしまいました。でも時々見かける友だちの様子は以前とあまり変わっていないように見えました。それから中学生になった私たちは、同じ部活動に入部することになり、また一緒に行動するようになりました。その頃も小学生の頃と変わらず優しくて真面目な印象でした。しかしそんな友達が、入部して四か月ほどで部活をたびたびさぼり、遊びに行ってしまうことが増えてきたのです。そのような時

はだいたいが新しくできた友達と行動しているようでした。私は一緒に部活がしたくて、来てほしいと説得しましたが、残念なことに一年生の後半ぐらいには全く来なくなってしまいました。そして二年生に上がるとついに退部をしてしまいました。するとそれから彼女に、グループでの問題が見えてくるようになりました。たとえば深夜徘徊、飲酒や喫煙、校則を破る行動、先生への暴言等です。小学生の頃はおとなしかった友達が中学生になり、あんなにも変わってしまったことに、本当に驚きました。でも、学校に来て会話をしている時は今まで通り楽しく話せるし、問題もおきません。だから私は、どの姿も本当の彼女なんだと思いました。どんな一面を見せるかは、周囲の関わり方なのではないかと思います。周りの環境や関わり方で人は大きく変化したように見えます。でも優しかった友達の姿はなくなったわけではないと思います。その人の本質はそう変わらないと考えるからです。今ある状況からどのように関われば彼女らしさが発揮できるのかを、周囲の大人や友だちみんなで考えることが大切なのです。悪い方にいってしまったから関わりたくない、もう戻すことができないということではなくどうやったらさらに成長できるかを考えて、関わり続けることが大切だと思います。

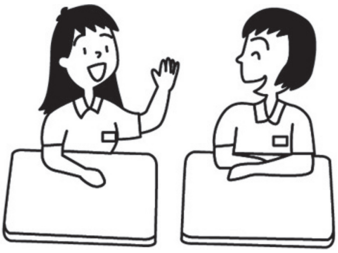
私は中学生という時期はとても大切な、自分を創る時期だと思っています。将来の夢を見つけ、どの高校に進学しようか、将来楽しく幸せに過ごすために今どうすればいいのか、そのことを考えられる状況は幸せだと思います。そんな風に過ごすには、周囲のサポートがとても重要だと思います。もちろん大人だけでなく、仲間として友達をいつも見守り、お互い支え合うことが大事だと思います。周りの環境が悪い方に連れて行ってしまったなら逆に周りの環境で元に戻すこともできると思います。

そういう私も部活をさぼりたい日があります。そんな時、いつも一緒に行動する友だちがいることでさぼらずに頑張れたことが何度もあります。

自分が揺らいだ時にそばにいてくれて、いつもと変わりなく行動してくれる友だちの存在はとても大きいものです。だから私も友だちが揺らいだ時に支えになれる自分でありたいと思っています。

社会を明るくする運動と言っても、中学生の私が社会に出て活動することは難しいことです。しかし、中学生の私にでもできることがあります。それは身近な人との関わりを大切にすることです。社会を明るくするには人との温かい関わりが一番大切ではないかと思います。ですから私は部活動や学校生活、そして習い事での身近な人たちとの関わりを大切にしていきたいと思います。特に自分とは考え方や立場の違う人たちが何を考えているのかを想像し、いろいろな考えを取り入れながら、皆が心地よく過ごせる部活動や学校生活を創っていけたらと思います。幸い、生徒会活動に参加している私は、学校全体の動きを把握して企画運営するという機会をもらっています。その機会を存分に生かして、学校から離れてしまった友達や仲間をもう一度呼び戻すことができればと思います。そうすることで明るい社会を築くことに貢献できるのではないかと思っています。

社会を明るくするために今自分ができる事はなにか。それを一人一人が考える事で今相手にどう接すればいいのか、相手のためにどう動けばいいのかが分かります。まず自分から行動してみると幸せの輪は広がり、いつか犯罪は無くなり、みんなが手を取りあえる温かく明るい社会になると私は思います。



更生保護法人　立川更生保護財団について

立川更生保護財団は、犯罪や非行をした人たちの改善更生を図るため活動されている民間ボランティアの方々が、困難な状況の中で、地道に更生保護活動に取り組む姿に深く感銘を受けた立川ブラインド工業株式会社創業者立川孟美氏が昭和63年10月に設立し、以来、更生保護事業を一層推進してきました。

財団としては、犯罪のない明るい社会の実現のため、次のような事業を行っています。

一　〝社会を明るくする運動〟～犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える地域のチカラ～への協力

本運動では犯罪や非行のない地域社会の実現のため、全国各地で様々な取組が行われています。財団としても、本作文コンテスト作文集の制作をはじめ、様々な取組に協力をしています。

二　保護司活動への協力

犯罪や非行をした人の立ち直りを地域で支えている民間ボランティアである保護司は地域社会で保護観察や〝社会を明るくする運動〟をはじめとした犯罪予防活動などに取り組んでいます。財団としては、保護司の行う地域活動や学校との連携活動に対して支援を行っています。

財団としては、今後も犯罪や非行をした人の立ち直りを支援している方々への協力・応援を通じて、犯罪のない明るい社会の実現に向けて、積極的に事業を展開していきます。

第73回“社会を明るくする運動”
～犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える地域のチカラ～
作文コンテストのお知らせ

第73回“社会を明るくする運動”作文コンテストは次のとおり、実施いたします。多くの学校でこの作文コンテストに取り組み、たくさんの応募をしていただきますよう、御協力お願いします。

なお、作文コンテストの詳細については、次ページの最寄りの保護観察所（各都府県の県庁所在地と、北海道では札幌、函館、旭川、釧路）にお問い合わせください。

○主催

法務省
“社会を明るくする運動”中央推進委員会

○後援（予定）

全国連合小学校長会／全日本中学校長会／全国小学校国語教育研究会／
全日本中学校国語教育研究協議会／公益社団法人日本ＰＴＡ全国協議会／
更生保護法人全国保護司連盟／日本更生保護女性連盟／
特定非営利活動法人日本ＢＢＳ連盟／更生保護法人日本更生保護協会

○応募規定

（1）資格

全国の小学生及び中学生

（2）テーマ

“社会を明るくする運動”の趣旨を踏まえ、日常の家庭生活、学校生活の中で体験したことを基に、**犯罪・非行のない地域社会づくりや犯罪・非行をした人の立ち直りについて**考えたこと、感じたことなどを題材としたものとします。

（3）原稿の枚数

400字詰め原稿用紙３～５枚程度

（4）応募先及び応募締切日

応募先：“社会を明るくする運動”都道府県推進委員会（事務局：保護観察所）
締切り：本年９月頃（締切日は各都道府県推進委員会によって異なります。
詳しくは、最寄りの保護観察所へお問い合わせください。）

（5）その他

応募作品は、他の作文コンテスト等への応募作品又は応募予定作品を除く自作・未発表のものに限り、原則として原本とします。応募に当たっては、題名、学校名、学年、氏名を明記してください。

○選考

“社会を明るくする運動”各地区推進委員会及び同各都道府県推進委員会によって選考し、同中央推進委員会に推薦された作品から、中央推進委員会において審査し、入賞作品を決定します。

○表彰（予定）

- 最優秀賞：法務大臣賞……小学生・中学生各１点
- 優 秀 賞：全国連合小学校長会会長賞……小学生３点
  全日本中学校長会会長賞……中学生３点
  全国保護司連盟理事長賞……小学生・中学生各３点
  日本更生保護女性連盟会長賞……小学生・中学生各３点
  日本ＢＢＳ連盟会長賞……小学生・中学生各３点
  日本更生保護協会理事長賞……小学生・中学生各３点

お問い合わせ先 “社会を明るくする運動”都道府県推進委員会事務局

推進委員会	事務局(保護観察所)	郵便番号	住　所	電話番号
札幌地区	札幌保護観察所	060-0042	北海道札幌市中央区大通西12丁目	011-261-9225
道南地方	函館保護観察所	040-8550	北海道函館市新川町25-18	0138-26-0431
旭川地区	旭川保護観察所	070-0901	北海道旭川市花咲町４丁目	0166-51-9376
道東地区	釧路保護観察所	085-8535	北海道釧路市幸町10-3	0154-23-3200
青森県	青森保護観察所	030-0861	青森県青森市長島1-3-25	017-776-6419
岩手県	盛岡保護観察所	020-0023	岩手県盛岡市内丸8-20	019-624-3395
宮城県	仙台保護観察所	980-0812	宮城県仙台市青葉区片平1-3-1	022-221-1451
秋田県	秋田保護観察所	010-0951	秋田県秋田市山王7-1-2	018-862-3903
山形県	山形保護観察所	990-0046	山形県山形市大手町1-32	023-631-2277
福島県	福島保護観察所	960-8017	福島県福島市狐塚17	024-534-2246
茨城県	水戸保護観察所	310-0061	茨城県水戸市北見町1-1	029-221-3942
栃木県	宇都宮保護観察所	320-0036	栃木県宇都宮市小幡2-1-11	028-621-2391
群馬県	前橋保護観察所	371-0026	群馬県前橋市大手町3-2-1	027-237-5010
埼玉県	さいたま保護観察所	330-0063	埼玉県さいたま市浦和区高砂3-16-58	048-861-8287
千葉県	千葉保護観察所	260-8553	千葉県千葉市中央区春日2-14-10	043-204-7795
東京都	東京保護観察所	100-0013	東京都千代田区霞が関1-1-1	03-3597-0120
神奈川県	横浜保護観察所	231-0003	神奈川県横浜市中区北仲通5-57	045-201-3006
新潟県	新潟保護観察所	951-8104	新潟県新潟市中央区西大畑町5191	025-222-1531
山梨県	甲府保護観察所	400-0032	山梨県甲府市中央1-11-8	055-235-7144
長野県	長野保護観察所	380-0846	長野県長野市旭町1108	026-234-1993
静岡県	静岡保護観察所	420-0853	静岡県静岡市葵区追手町9-45	054-253-0191
富山県	富山保護観察所	939-8202	富山県富山市西田地方町2-9-16	076-421-5620
石川県	金沢保護観察所	920-0024	石川県金沢市西念3-4-1	076-261-0058
福井県	福井保護観察所	910-0019	福井県福井市春山1-1-54	0776-22-2858
岐阜県	岐阜保護観察所	500-8812	岐阜県岐阜市美江寺町2-7-2	058-265-2651
愛知県	名古屋保護観察所	460-8524	愛知県名古屋市中区三の丸4-3-1	052-951-2949
三重県	津保護観察所	514-0032	三重県津市中央3-12	059-227-6671
滋賀県	大津保護観察所	520-0044	滋賀県大津市京町3-1-1	077-524-6683
京都府	京都保護観察所	602-0032	京都府京都市上京区烏丸通今出川上る岡松町255-4	075-441-5141
大阪府	大阪保護観察所	540-0008	大阪府大阪市中央区大手前4-1-76	06-6949-6240
兵庫県	神戸保護観察所	650-0016	兵庫県神戸市中央区橘通1-4-1	078-351-4005
奈良県	奈良保護観察所	630-8213	奈良県奈良市登大路町1-1	0742-23-4869
和歌山県	和歌山保護観察所	640-8143	和歌山県和歌山市二番丁３	073-436-2501
鳥取県	鳥取保護観察所	680-0842	鳥取県鳥取市吉方109	0857-22-3518
島根県	松江保護観察所	690-0841	島根県松江市向島町134-10	0852-21-3767
岡山県	岡山保護観察所	700-0807	岡山県岡山市北区南方1-8-1	086-224-5661
広島県	広島保護観察所	730-0012	広島県広島市中区上八丁堀2-31	082-221-4495
山口県	山口保護観察所	753-0088	山口県山口市中河原町6-16	083-922-1327
徳島県	徳島保護観察所	770-0851	徳島県徳島市徳島町城内6-6	088-622-4359
香川県	高松保護観察所	760-0033	香川県高松市丸の内1-1	087-822-5445
愛媛県	松山保護観察所	790-0001	愛媛県松山市一番町4-4-1	089-941-9983
高知県	高知保護観察所	780-0850	高知県高知市丸ノ内1-4-1	088-873-5118
福岡県	福岡保護観察所	810-0044	福岡県福岡市中央区六本松4-2-3	092-761-6736
佐賀県	佐賀保護観察所	840-0041	佐賀県佐賀市城内2-10-20	0952-24-4291
長崎県	長崎保護観察所	850-0033	長崎県長崎市万才町8-16	095-822-5175
熊本県	熊本保護観察所	862-0971	熊本県熊本市中央区大江3-1-53	096-366-8080
大分県	大分保護観察所	870-8523	大分県大分市荷揚町7-5	097-532-2053
宮崎県	宮崎保護観察所	880-0802	宮崎県宮崎市別府町１ー１	0985-24-4345
鹿児島県	鹿児島保護観察所	892-0816	鹿児島県鹿児島市山下町13-21	099-226-1556
沖縄県	那覇保護観察所	900-0022	沖縄県那覇市樋川1-15-15	098-853-2946

第72回“社会を明るくする運動”作文コンテスト入賞作文集

発　行　更生保護法人　立川更生保護財団
編　集　“社会を明るくする運動”中央推進委員会事務局
製　作　株式会社　双文社

※本作文集の作品を転載する場合は，法務省保護局更生保護振興課に御連絡ください。

令和5年3月発行

人はみな、
生かされて
生きてゆく。
更生保護ネットワーク